

河柳雅の証

麻生路郎★主宰

四月號



Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.347



次 目 号 月 四

題 字	麻生路郎
表 紙	米田三男之介
窓 口 談 義	麻生路郎 (三)
久 良 伎 先 生 傳 遺	前田 俊郎 (四)
補 福 を 幸 福 に	戸田 古方 (六)
幸 福 を 幸 福 に	丸尾 潮花 (三)
訪 ね て	北川 春渠 (四)
患 者	安川久留美 (五)
ぬ か ぶ く ろ	長野 文庫 (三)
街 の 雜 感	東野 大八 (三)
日 僑 俘 に 寄 す	福田 丁路 (三)
川 柳 は 生 き	不二田一三夫 (五)
句 評 偶 感	前田 伍健 (三)
俳 緣 柳 緣	築山快夢起 (四)
旅 に 拾 う	志賀津世詩 (二)
B K 趣 味 の し お	七句以上の人々
り 放 送 休 止	社 の 黒 板
七 句 以 上 の 人 々	志賀津世詩 (二)
社 の 黒 板	★
不 朽 洞 句 帖	麻生路郎 (三)
川 柳 塔	麻生路郎選 (六)
同 舟 近 詠	諸 家 (五)
近 作 柳 櫛	麻生路郎選 (六)
一 路 集 「リベート」	北川春渠選 (六)
金 泥 集	土井文蝶選 (八)
各 地 柳 壇	長野文庫選 (六)
川 柳 第 二 教 室	麻生霞乃選 (七)
作 句 指 導	戸田古方 (六)
不 朽 洞 会 展 望	戸田古方 (六)
公 私 雜 記	(三)

會 句 月 四 社 本

兼 題	「花 見」 (三句) 麻生路郎選
日 時	四月七日 (土) 午後 六時
場 所	光 明 寺
柳 話	三 題 (当日発表)
席 題	麻生路郎
同 話	川村好郎
呈 賞	★ 各題天位 ★ 路郎選天位に不朽洞賞
會 費	五 拾 円
幹 事	紫香・淡舟・賀峯・いさむ・白水・水堂・愛論・一三夫

注意
本社の句会は毎月七日
を定例日といたします

川柳雜誌社句會部

學生教養新書 全五十卷
日本圖書館協會選定圖書

川柳とは何か

「川柳の作り方
と味い方」

二五〇円 送三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳
がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動
くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五
十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平
易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

取 次 川 柳 雜 誌 社

至 文 堂

東京都新宿区払方町



窓口談義

「大万川柳」ではベストテン制をとって、毎月各作家が優位を競うているが、それ等の作家の動きを見ているとなかなか面白い。作品の価値は必ずしも多数抜けたから秀れているとは限らないが、多数抜けたためには素質以上に努力を要することが、ベストテン制から判断出来るような気がする。

「大万川柳」のベストテンで最近連続優位にあるのは催主の梅里君である。催主として、ベストテンの埒外存在であるとしたら心穏やかでないことは想像に難くないであろう。そこに涙ぐましいほどの努力が生じるのである。或る人は催主が優位にあるのは選者との八百長であろうと云われるかも知れぬが、そうした非難をなくするために催主の方で全部

清記し作品に作者名は一切記載されていないのである。従って選者は優劣を決める選句機械に過ぎない。選句がすめば直ちに催主に返稿するのである。選句を受け取った催主が句箋の一枚一枚を眼を据えてめくって行く真剣な態度を眺めたなら、おそらく八百長が行われていたであろうなどという疑念はたちどころに霧散するであろう。たとえ一句でも抜けて居ればホットして喘息をつき、三才に入選していれば忤心の笑みを洩らし、一句も抜けていなければ（そんなことは稀だが）ガツカリして、選句発表の筆がすすまないそうである。ある時など一枚一枚の句箋をめくって行っても自分の句が出て来なかった。ところが最後の一枚が天位に抜けていた。その時には

血の湧きあがる思いがしたと告白をしている。この熱意が凝って優位を他に譲らない最大原因ではなからうかと思う。

応募者の中に、梅里君よりも秀れた作家が存在することを否定する訳にはいかない。イヤ確に存在すると思うが、それ等の作家が優位を常に梅里君に譲らなければならぬ原因は一年を通して授句への熱意に緊張味を欠く点にあるとしか考えられない。又或る年度に於けるベストテンを勝ち得た優秀作家にしても、授句を怠ったためや中途から参加したために優位を占めるに至らなかった人たちが居るであろう。この場合に私たちのアタマに浮ぶのは不断的努力という言葉である。

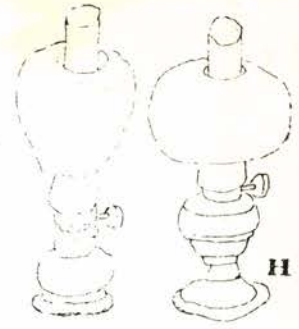
五十回出席の記録を持っていると聞く。一ヶ年十二回連続出席者の数も年々殖えては来たが、それでも十二、三名に過ぎない。連続出席がいかに至難であるかが判るであろう。淡舟君の五十回連続出席は全く異例であるかも知れないが、そうした出席への努力は作品の成績へ響かない訳はないであろう。しかし私は、その作品の向上というよりも、むしろその生活が常に安定している証左であること

とをよろこぶものである。その人の生活の安定、心の平静の下に、川柳し得るその人の人生は幸福に違いない。物質がもたらす幸福は不測の災いによって失うことがあるが、常に川柳し得ることが、常に、かち得た幸福は火にも焼けない幸福であるからである。

不朽洞句帖

麻生路郎

来ぬ人を待つにマツチの軸をかみ
又父が葬儀の委員長にされ
番号もいつしかねだることを知り
これ非売品やぜという鯛を描き
この床にこの鯛マツチしてるとさ



(上)

四月三日は阪井久良伎先生の命日である。先生は昭和二十年に亡くなっておられるので、今年はその十二回忌ということになる。明年は十三回忌として当然柳界に何かの催しが持たれることと思われ、それが、その忌日を前に、これまであまり柳人の間に知られていなかった先生の、川柳家として起つにいたった動機というか、その辺の事情につき、少し考えてみたいと思う。あるいは、現行の久良伎伝に於ける落丁を、これによっていさゝかでも補うことが出来たらとの願ひに他ならない。

従来先生を伝するものは、恐らくその年譜によつたもの

久良伎先生傳 補遺

前田 雀郎

と思われるが(本山桂川氏編の「川柳久良伎全集」には、先生の年譜が添えられてあつたように記憶するが、私は戦災で同書を焼失してしまつたので今そのことを確かめ得ぬ。従つて以下記すところの年代も、多くは私の手さぐりになるものであることを、併せてお断りしておく)

先生は年少国学者渡辺重石丸の門に学び、平田篤胤の講本によつて川柳の興味あることを知り、やゝ長して明治十六年頃、団々珍聞の九世川柳選の狂句(前嶋和橋が九世川柳を嗣いだのは明治二十六年であるから、これは久良伎先生自身の記憶違いか、或いは年譜製作者の誤りであらう。但し私はその頃、誰が団々珍聞の狂句の選者であつたかを知らない)に応募、これを実作の手始めとし

て川柳に傾倒するところあり、明治二十年「日本新聞」に時事川柳を寄稿(「日本新聞」の創刊は明治二十二年二月十一日、即ち憲法発布の当日であつて、こゝにもまた誤りが見られる。その縁をもつて後、同社に入社もして居り、新川柳勃興の事情を明かにした当時の「日本新聞」主筆古嶋一雄の「一老政治家の回想」もまたこのことを裏書するかのよう

に「その後自ら川柳の師匠と称する阪井久良伎という江戸川柳の流れを汲んだのは俺一人だというのが出て来たので、これを頼んだ」と、先生の「日本新聞」入社に就て語り、先生の既に早くより川柳に志すところあつたかの如くしている。

しかし私には、どうもこれらの記事に信がおけなかつた。というのは、由來年譜或いは小伝なるものは、その人の(事業に於ける)成長を体系付けようとして、無理にも些事をそこに結んでこれを意味あるものゝ如く受取らせようとする傾きがある。例えば「井上剣花坊句集」に添えられ同先生の小伝が、先生の外祖父を始めその尊族の人達に和歌俳句等を嗜むものが多かつたことを云い、生母また実作のことはなかつたが「よく古川柳や芭蕉や支考の事などを記憶して、時折幼い先生の耳に吹きこんだ」として、斯く「純真可憐の幼年期に早く既に古川柳の名句を胸深く呼吸したという事が、不知不識後年の川柳剣花坊たるべき因をなし身を作した」と見るべきであるとしてゐるが如き、後年の剣花坊先生の古川柳に対する関心事は知識の程度を知るものには誠にこそばゆきを感じるもので、これまた久良伎先生のそれに於けると同工異曲、何かそこに牽強附会の氣味を感じぬ訳にはいかないからであり古嶋翁の回想にしても、久良伎先生の「日本新聞」入社(前にも記したように、今手

許に先生の年譜を有さないの、前後の事情からの推定ではあるが)明治二十九年のことと思われ、明治二年生れの、当時二十八歳の先生が、いかに自負するところあつたとしても、まさか自ら「江戸川柳の流れを汲んだ」唯一人の「川柳の師匠」と称して乗込んだとは思われず、これには川柳に志を得てからの先生の言動が十分影響しているようで、いつか古嶋翁の記憶がこゝに歪められたものゝように考えられる。従つて入社当時の先生をそこに思い描くには甚だ遠い文章であり、これにて直ちに背きをおくり得ぬものがあるからである。

久良伎先生の川柳家としての発足に就て、こういう疑いを繰り返している時、私はたま／＼ひもといた河東碧梧桐篇「子規言行録」の中に久良伎先生の「師長を以て居らず」という一文を発見した。この「子規言行録」というのは、子規の歿後、彼に親炙せる人々によつて書かれた思い出をあつめたもので、先生また子規との交遊のあとを記さ

れているのであるが、人はそのことを離れたところに於て、しばしば真実を語るもので、先生はこの文章に於て、自ら「日本新聞」入社前後の行動を明らかにされているのみならず、川柳への関心の成長をも、そこにおのずと窺わしている。いわゆる問うに落ちず、語るに落ちるていの告白を行っているのである。私はこの一文を得て、私の疑いのやゝ当れるを知ると同時に、何か眼前に一本の道のひらけ行くのを覚えた。

こうして私の頭の中に明治三十年代の久良俊先生の映像がだん／＼その姿をかたちづくり始めていると、思いもよらず佐々木信綱博士が、その影を一層濃いものとしてくれた。即ち昭和三十年十二月八、九の両日、博士が「東京新聞」の文化欄に寄せられた「落合、与謝野、正岡君の追憶」という文章は、久良俊先生のことに触れ、当時の先生の行動を知るに充分な資料を提供されたのである。そういう一方、それに前後して中央公論社より発行の吉井勇氏の「東京、京都、大阪」という新書が、また当時の久良俊

先生に就て、貴重な資料を示されていることを知った。私の脳裡に描くところのものは、この二つの裏付を得て、いよいよその影を濃くし、今はその想像の大体に於て誤りなきを思うようになった。先生の川柳家として起たれるにいたった動機を私はどう見るか。以下しばらく御清説を頂きたい。これは川柳の革新運動はいかなる動機に始まるものかをもまた、おのずから明らかにするものではないかと思うのである。

久良俊先生が川柳の革新を志されたのは子規の感化によるとは、先生自ら今井卯木著「川柳江戸砂子」の序文の中に記すところである。従つてこのことに就て語るには先ず先生と子規との関係から見て行かねばならない。この両者の関係に就き現行の久良俊伝は、先生が子規と共立英語学校の同期であったことを云い、早くより交渉が持たれてあったかの如くしているが、前記「子規言行録」所掲の先生の文章「師長を以て居らず」によると、先生は共立英語学校時代には単に同期というのみで何等の交渉をも持た

ず、寧ろその人をさえ知らなかったかのようである。即ち先生はこう記している。

「余の先生（子規のこと）を知るや、実に明治廿八年にあり。時に余、豊城渡辺先生の塾下に在り、筆を雑誌「闇夜乃灯」に執る。当時余慷慨義憤の声を喜び、膠々然として古人に私淑す。一に世上の文学者流を蔑視し以て腐腸の徒と為す。況んや俳人の如き、俗惡近く可からざる者とせり。然れども先生の異彩世上操触の輩と撰を異にするを知り、簡を馳せて先生の俳句を乞ふ。返して曰く、文学上の意見必らずしも君と合わず、恐らくは貴望に反する者あらん。但試に灯十句を贈らん、採否貴意にありと。余再び書を贈る。先生其来訪を促す。乃ち其草廬を叩く」と

のことは後に触れるところあるので特に注意を頂かねばならないが、それはそれとして先生は、こういうきっかけから子規に近付き、後しば／＼その門に出入することゝなつた。しかし右の如く先生は俳句に興味を持たなかつたので、多くの場合歌学に就て子規の意見をたゞいたようであつた。

先生は生前よく私などに「子規に歌を吹き込んだのは僕だ」と云われていたが、これは必らずしも先生のうそぶきではなかつたらしく、当時子規は俳句革新のことも一先ず目鼻がつき、いわばホツと一息という時であつたから、久良俊先生により歌学のことを問われ、また古い歌人の家集など示されること多きに及んで、新しくこれに心動いたと見られぬこともない。事実子規が短歌の革新運動に行動的に踏み出した第一歩とも見られる根岸短歌会の最初の招集は先生がその門に出入し始めてからの後の、明治二十二年三月十四日であつた。

附記 久良俊先生の忌は、先生逝去の翌年、即ち昭和二十一年のその日、当時東京に唯一つ残つた川柳結社、村田周

魚君のきやり吟社の主唱により、新富町の見番楼上に営まれたのを最初に、その縁をもつて引つゞき年々きやり吟社主催のもとに修されて来たが、その七回忌に当り改めて旧門下によつて営まれることとなり、きやり吟社よりこの手に移され、西念寺に於てわずかに一回の催しを見たのみで、その後種々の事情よりそのことなく、幹事の任にあつた富士野鞍馬君京都に去り、同じ阪下也奈貴君また近いて、今は東京に責任をもつてその忌を営む人を失い、何か淋しさを覚えるというよりも、先師の靈に對し申訳ないものを感ずるので、私は終生破門の弟子たる身の、その任にないが、大方のお許しを乞い、本年より私の丹若会の四月例会をその日として、向後年々久良俊忌を営ませて頂くことにした。これで丹若会も従来から営んで来た秋の剣花坊忌に併せ、新しく春の久良俊忌を持つことが出来、両先師の靈にひとしく報恩の誠を万分の一にもせよいたせることとなり、有難い次第と感謝している。こゝに余白を借り謹んで御報告する。

（筆者は東京都「せりう」社員）



大阪市 中島生々庵

リペートのつもり二号に養われ

長生きもしたいし金も貯めたいし

妻と来た湯の宿の日の長さ

豊中市 戸田古方

ひかかるものかと詭弁へ黙秘権

宮仕えを正当づけている詭弁

大阪市 市場没食子

年越の豆も手古する歯とて憂き

マフラーも年相応の色に老け

春早々職安所へもこの人出

霜降りる頃を呑んでる高架下

ホノルル市 内藤草一郎

お手がなるすかん方やと眼を合せ

ワイキ、の姿暦は冬なれど

引退へ趣味の無かったのに気付き

大学を出したに労組の幹事とは

社長案借りた智慧とは見えぬなり

子の智慧は家業に向かぬ方へ延び

東京都 宮田不二

病氣などするひまはない小商人

俳優としても手錠はつめたかる

バス嬢にも話かけたい嬉しい日

米子市 三鴨美笑

偽物と知ってしみみ見詰られ

ほんとうは貴方が好きと悪びれず

家族から傍姿を見なむされ

東京都 前山北海

春寒く隣りのものを妻は編み

派手はたたかれみみちささきやかれ

補聴器をつけてマイクへでかい声

蛇口から水たらたらと京を見る

鳥取市 大西八歩

親類の面倒も見ずにテレビ買い

童心に還れと雪のこんこんと

アイロンを待つ間新聞あてがわれ

大阪市 正本水客

孤独とは淋し雑煮も独り喰べ

ひとり旅夕陽の沈む位置みてる

内職を見ている方で肩がこり

通るたんびに受付の娘が笑いかけ

池田市 黒川紫香

コンクリートヘスリッパの音なじまない

退職金もろてほんとに老いぼれる

御機嫌さん云うて保険の名刺くれ

大阪市 丸尾潮花

なにを釣る舟か濠の朝を出て

娘の膝で弾いても三味の音がする

ロマンスグレイビーの栓がまた抜かれ

人形の寂しさまばたきひとつせず

女形背広の型をくすさない

川風をなぐめにうけて女待ち

本当の薄謝へむと腹をたて

大阪市 北川春巢

スタイリストもう一二寸背がほしく

二級とは知らずに酒をほめちぎり

女教師の型で市電に読みふけり

写真機が借れ神詣り思いつき

焦げ臭いぞとだし拔けに父帰る

奈良県 尾崎方正

勉強をやめるとも鳴るみおつくし

平凡に暮す苦勞は父がする

日帰りでもする気洋行黙り発つ

襟突いて端然と客に向いたり

かたんことん汽車は何かを語るよう

元旦は子供になつて遊びたし

下関市 桜川不水

女の居ないお座敷なんて淋し

お爺ちやまのおつもへ休む冬の蠅

ガイガーを当てゝも見たい熱し様

手の平に乗せてみるのも春の土

大阪市 菊沢小松園



押売りの断り方も柔と剛

分け前のことで一汽車遅らせる

喰べものゝ話になって襖開け

税務署の葉書は飯の後で読み

ある時は親も子供の眼をおそれ

手暗がりになる様にして財布開け

釈尼妙修(三女十六才急逝)

覚悟した晩のお寝みだったのか

死ぬ程のうしろ姿と思わざり

諦めて覗く死顔鼻高し

納棺へ独歩バイブル龍之介

慰める方も涙で声が出ず

みをつくしの鐘も空しく響くのみ

大阪市 武部 香林

誕生日息子の嫁の酌も受け

薬局診断あた名医の口調にて

子の嫁へ時代のすれをもてあまし

客も出来読書も出来る茶の間欲し

大阪市 福田 妄夢

子をあすけ妻と二人の純喫茶

みたされぬ目をしただけ犬また丸くなり

出雲市 尼崎 之助

寒稽古腹のたない気合聞く

二男三男の場合

現実の風ぬくからすよいか子よ

明日あるを信じふとんにいる母子

大阪市 水谷 竹莊

愛の巣を女男にさがさせる

野球見るロマンスグレー職がなし

晩酌にからすみがあるいゝ身分

中年の恋は恥しさを知らず

ビルの谷間へ手相屋灯をともし

集金人に二号浮気を見つけられ

箱根山

富士見台みんなカメラを持って降り

母親のいら／＼入試の子は笑ひ

旅へ出て妻は甘えて見たくなり

母親が痾を立ててゐるレスこ

下積も亦よし煩う事もなく

叛かれて忘れて行ったコンパクト

鳥取市 杉谷 湖山

プロパンがとどく市営の住宅地

チョッピリと弔辞にうそも入れて置き

斗病記ナースが好きとは書いていず

スキー場から賀状を出せるいゝ身分

兵庫県 小西 無鬼

淋しかるとしてお通夜のにぎやかな

甘えとく事もエチケットの一つ

貸間した不運小言もよう云わす

満場の視線集めた喪主若し

借物と見えす喪服の板につき

尼崎市 小林 文月

満員の車背にうごめくは小女らし

靴音だけがこだまする朝の街

ぜんそくの咳までわびしひとりの夜

捨てられたらしい死にたい繰返し

火を出した方は保険でとくに建ち

唾涎の金に見向きをせぬも意地

利益順調パトロン邪魔になり

課長留守流行歌をばタイプする

一匹の鯛を母子で裏表

天王寺のぞきのむちも春の音

囲われて弾く三味線はうる覚え

解答欄では税務署御親切

四十になっても流行歌など唄い

結婚をして客号を返上し

新聞の我が名は火事の火元にて

浮気の報酬又も父無し児を孕み

四十女ひとの恋路の邪魔もして

煙草の輪その輪に妓夢を持ち

岡山県 直原 七面山

大阪は空まで狭い路地に住み

御飯ですよと覆面母に叱られる

春だもの仏のまぶたも垂れ給う

紐つけて引っぱりましょかイヤリング

大阪市 西森 花村

満員の車背にうごめくは小女らし

靴音だけがこだまする朝の街

ぜんそくの咳までわびしひとりの夜

捨てられたらしい死にたい繰返し

火を出した方は保険でとくに建ち

唾涎の金に見向きをせぬも意地

利益順調パトロン邪魔になり

課長留守流行歌をばタイプする

一匹の鯛を母子で裏表

天王寺のぞきのむちも春の音

囲われて弾く三味線はうる覚え

解答欄では税務署御親切

四十になっても流行歌など唄い

結婚をして客号を返上し

新聞の我が名は火事の火元にて

浮気の報酬又も父無し児を孕み

四十女ひとの恋路の邪魔もして

煙草の輪その輪に妓夢を持ち

大阪は空まで狭い路地に住み

御飯ですよと覆面母に叱られる

春だもの仏のまぶたも垂れ給う

紐つけて引っぱりましょかイヤリング

大阪市 西森 花村



冬の音なりけり冬の夜釘打てば
温泉で垢を落して逮捕され

鳥取市 河村 日満

雪雪雪どつと旧正らしくする
すばり／＼言う奥さんに気が疲れ

水かけたように酌婦の恋は消え
伯耆富士絵筆をとらぬ身がさびし

兵庫県 田代 輝四

モーションをかけっぱなしで酔いつぶれ
魚釣りの根ほど仕事精が出ず

大阪府 西 いわを

それどういう意味と女未だ若し
囚人が顔の表情忘れかけ

岡山県 横部 牛歩

お葬式子ははしやいではしやいで
正直とはめてもうたあほらしき

恩給を貰う隣が憎らしく

更年期始かない妻のフト寂し

禁酒した時は財産ゼロであり

岡山県 服部 十九平

末っ娘の気質草月流へ向き
娘の着更え部屋一杯を派手にする

枕だけ数が足ってる雑魚寝部屋

尼崎市 長谷川 三司

借に米た証拠は菓子も茶も飲まず

評判も味もそんでないマダム

縞子の靴南豆町は冬の貌

おしほりへメニューは高い値を列べ

兵庫県 若林 草右

井池でチャチな買物やってのけ
測候所三寒四温でかたづけける

餅網の上で改札パンチ入れ

鼻糞の株で見ている相場欄

年頭感祕書に書かせて湯につかり

大阪府 足立 春雄

花ちりもストのニュースが先にくる
お役所で親切にされまごついた

探検の金もないのに出したがり

荷物から首だけかつぎ屋出して降り

下駄の音今夜も霜と云う響

熊本府 有働 芳仙

斗病人門

療養所此処にも見栄がありはあり

肺切の話林檎を剥きやめる

廻診に婦長マスクの中で笑み

療養所歌人俳人クイズ狂

高知市 大西 迷窓

激しきはサナトリウムに燃える恋

看護婦の恋は窓から見えぬとこ

寂しきは少し貰うて二号の名

大阪府 浜畑 胡蝶

お役所のミスをこんなに書きたてる

子もなく保険をかけて淋しがり

唇をリングにふれた腫がきれい

秤の目見ぬふりしても見て帰り

広島県 山田 季賛

無口でも司会上手にやって見せ
合併をした町赤字なお太り

事なかれ主義に大安揆はれる

粉雪に雀の騒ぐをきいて病む

大阪府 山本 葉光

大根を干して小成にあまんじる

のん／＼と警鐘乱打知らず寝る

顔立てた話へ顔がふらりようか

倉敷市 田垣 方大

どこを見つめていてもでもない失意

面白い方ねと妓言っただけ

お巡りのベタルも遅い春の風

石川県 那谷 光郎

税務署へ言つた嘘なら手柄にし

役得で呑んで浮かれてかくし芸

イヤリング明治の母は気に召さず

ガールフレンド来る日万年床を上げ

大阪府 木村 水堂

パトロール無事な寝息の術を練る

牛乳とパンでこと足る課長連

内職の妻へ気兼ねをするタバコ

妻と子を連れた映画はアチャコにし

堺市 八木 摩天郎

二等車は勿体ないと袖をひき



書見器へ母青空を明け放ち
青空にのぼる煙も春なれや

倉敷市 相原 一善

クサメした時に自動シャツタ下り
あんなのに嫁かれますかとは慾目
此の鯛がアンタの腕で釣れますの
ネンネコを平気で着てる子煩悩

岡山県 田村 藤波

交換手夜中の甘い声に酔い
女給ムツとしてメニユーつきつける
メートルをあげて練名がみだれとび
出張の数がコケシの数になり
そんな約束したかいなあと妓にとぼけ

岡山県 岡田 夜潮

ひやかせば要らぬ御世話と負けて居す
やき判を妻に押す訳にも行かす
軒下にぶらり去年の水枕
年寄をバスに立たせてコンバクト

大阪府 稲葉 鳩花

君とこも不如意かそうかと茶をすゝり
ウアハハハしてやられたか玉手飛車
風格は無いが社長の座に坐り

岡山県 本田 恵二郎

宿題のように縁談置いて去に
代償はキッスだけとは引きあわす
世間の眼出戻ったわけ知りもせず

大阪府 真鍋 一瓢

恋知ってからは喰べようまで変り
医者はまだ通わすつもり言い切らず
背広着たんで湯豆腐とも言えず
遂に遂に生れた事に疑義を持ち
御主人がちと頼りないので貯まり

京都市 松川 杜的

旅費稼ぐ積りが切符送って来
葱坊主淋しかろうが今暫し

大阪府 永田 六龍子

春はもう隣まで来ている植木鉢
鳥取市 森本法泉子
何処でどう遊ぶか按摩の公休日
通勤のみんなスポーツ版をもち

大阪府 後藤 梅志

立読みのきょうも極つたところで読み
在りようは一個の器女中呼ぶ
騙された感じで田舎蕎麦を食い
胡座かくとこに師匠は馴れぬなり
嫌いだと犬もぶるつとやって出る

大阪府 小池 しげお

テニスしていたら息子と間違われ
何時からか恋にかわっている電話
倦怠期ラジオも切りに行かぬなり

倉敷市 松村 万古

マダムまで呼んで騒いでノーチツブ
縦のものの横にしたのも賞に入り

方六氏榮進を祝す

方針に適うて今日の大を為し
会場を出てから女意見吐き

倉敷市 藤井 春日

御苦勞さん早う仕舞えと言える地位
よく勤めよく飲み家計火の車
労働は神聖なるぞとさんま焼く
懷爐まで持たせて義太夫聞きにやり

岡山市 津田 麦太楼

恐妻家と言われて含み笑いをし
肉慾の機縁に薄く老けてゆく
泥んこのバスが通るよ梅の花
痔を病んで後架の窓に聞く初音

米子市 小西 雄々

訪問をまたせ汗ふくボディビル
酌をする順番マダム心得る
婦人科の増殖世相のせいにする
慾望に負けたくはなし避妊薬

大阪府 橋本 峰春

あそこ迄落ちぶれながらみえをはり

吹田市 橋本 幸男

洗濯機買えばすなおな妻になり
ラッシュアワー指名犯には手がのびず
アルバイト娘はキッスをもてあまし
年賀状追伸までが飲む話

堺市 高崎 雄声

こせ／＼として大物によるならす
できぬ身も人のすることおかしくて



大阪市 吾郷玲人

住込みの我が娘を探す帝塚山
生理日と言うてひばりへ午前五時
大安と言うに徴税令書くる

禿になるなやとパーマへ妻をやり
一本のマツチで燃え付きそうな家
飲まないと聞いたにタグの酒は飲み
巻頭へ社長の俳句らしきモノ
酒で殺しといて母と子は映画

岡山県 岡田青果

不義をする部屋とは知らず梅が咲き
進学の希望捨てさす不倖

どん底のくらし本当の愛で生き
ミス日本こんな梅干婆になり
避妊器具埃りが積んだ倦怠期

西宮市 若本多久志

この車掌うちの息子によく似たり
昏は二夫にまみえてバーに住み
死にますに且那少うしあわてたり
月末になりや逢いたいと女文字

島根県 藤井明朗

よい腕が有るに清貧という生活
籤ざわは成程雀しやべりなり
息切れにもう年だと軽く言え
今夜からあんと呼んでせまい部屋

岡山県 永松東岸子

午後五時へ新婚婦心矢の如し

大臣を呼び捨てにする三等車

女秘書から不渡りのことが洩れ
おでん屋で逢えば巡査のやわらかし
牛神社の奉仕に出て

倉敷市 野田素身郎

縁談へ自分一人がまだ喰えす
古本を買うにデパートまで出かけ
親切にあまえきれない自尊心

倉敷市 安原斜木

外交は歩合酷寒と云うとれす
自分だけ喰べて帰ったのが淋し
吾が家とは良きもの炭をもっとつけ

吹田市 菊田いさむ

化粧代節約してる素顔なり
惚れてる気勘定はまかしといてね

大阪市 神谷凡九郎

映画なら流す涙は持っており
いらぬ事言うてヤキモチやかせに來
此の節は手鍋さけては来てくれず

大阪市 山川阿茶

豆五寸麦三寸の間ゆき

待つ人はどこで見ている後の月
財布だけ昔の名残金具
姐さんの鶴の一声思いきり

横槍が旦那から出た男舞

信用をしてねとしやくりあげ

大阪市 清水望峰
寝てる首しめられそうな倦怠期
娘の料理ハカリを近所からかりて

倉敷市 水谷谷水

生々しすぎて悔みも言えなんだ
スリルかは知らぬが貞操まで賭けて
社会的地位を恐れて堕胎させ
子飼の恩忘れて恥すかしくないか
桃色の話が好きな課長さん

大阪市 伊達堰子

老嬢の今日も人形みつめてた
整理され卑屈いよ／＼卑屈なり
恐しい嫉妬だ子まで連れて死に

大阪市 不二田一三夫

告別式帰れば隣り産れとり
息してる丈けの暮しに見得も要り
会葬で貸しの有るのと巡り合い

孝行をして貰うほどみてやれず
妻抱けばあんま宵の匂いがし
雨情作パンパンなどの口にされ
二度目から女のほうに誘いに來
為すことすること当って立志伝
手にとって見れば桜のわびしさよ

兵庫縣 酒井ひか平

貧しさへ鼠も走り廻るなり
さあ隣り迄普及して來た洗濯機



没落は淋しどっしりした土蔵

大護摩でもつたいないが背をぬくめ

激論もしつつビールの泡も吸い

水っぱなすゝって居ても蓄めて居り

無信心お宮の前に居りながら

グットバイ後姿へ雪が舞い

送別の握手二本の手で足らず

倉敷市 佐藤千代春

疲れたと親父は岩のような胡座

逢引を見張りの小屋に変えた雨

大阪府 深見雅堂

一切れの紙が僕をば臍にして

いゝ人が出来た悩みを聞く家裁

アルサロに勤め長屋の目をばさけ

京都市 松下京一樓

臍繰った位ですまぬ借が出来

報告書抜けた処をつゝこまれ

宇都市 津秋六花

押売りの度胸女一人と見てかかり

洋服で来て神主のうまいジャズ

神戸市 野村初市

名物はあつちこちと分けたがり

わたしではいきまへんのどすやろはしご酒

女子大を受けるゝと二年越し

大阪市 金井文秋

ラッパ呑みあとで世話などさしてなや

酒では取合わず素面では丸められ

立読みの間に止んで傘忘れ

虚栄心夫みくびる癖がつき

間借りだと知れる仕切りのベニヤ板

進学の際は親の方が持ち

税務署を恐がる程も儲けてす

惑わずと言われる齢に夜逃げする

岡山県 大橋遊子

初雪を子ら病床まで見せに来る

宿直の夜休んだ児を案じ

組合の斗士と見えぬ恐妻家

岡山県 戸田喜楽

父と出る日の口紅はうすく塗り

うえ死にをする人もありネオンの灯

姑の屋敷へ気兼ねするミシン

岡山県 池田古心

廻り持ちと云う銭トント寄りつかず

押売はせぬが前科を先づ披露

縁談の進む火鉢へ炭をつぎ

財産へ野心かくした養子が来

東京都 石居高志

下げてみて羊羹だと言う土産

酔うて来てナイフフォークが邪魔になり

言訳を打ち切られたが不平なり

奥さんのつもりで抱けとぬかしたり

岡山県 坂手有子

変骨は放つとく事でけりがつき

煙草代程の辞令を羨まれ

里帰り母の馳走が喰べ切れず

八卦よりカンのきいてる妻をもち

物好きが葬式までも見に出かけ

岡山市 土井雷山

勝力士芸者の握手もてあまし

行末を名取りにしたい芸をつけ

岡山県 三村柳風子

実力がある末席をもてあまし

新名所矢張りこけし売っており

野甫改め

大阪市 早川清生

婦心矢の如し後妻をもろており

仲人を頼んで少し借せという

撥おけば師匠淋しきプロフィール

おのろけの一種恐妻ぶってみる

極道を直しに貰われたとは知らず

大阪市 武部若菜

二世までも嫌と女の笑い合い

仲人が感心をして見合すみ

順々に口を減らして母肥り

らくさせて呉れますと子をひけらかし

小松市 伊藤茶仏

そう言えばそうだったなと夫婦きり

赤ん坊みたいですよと惚れている

足の裏磨き女湯込んでいる

面白い奴さと社長白ばくれ

・縁柳縁俳・

前田 伍 健



昨年の秋即ち昭和三十年十一月の或日私をたずねて来た一画伯がある。名刺を見るとアメリカで画の修行をやり最近帰朝で今治市在住の鳥生柳丘さんである。何さま知合いもなく幸い愛媛県美術展が最近あるのでそれに出品しこれに足かゝりに画界と社会へ乗り出したい、ついでには（このついでには）が点火せられ昭和三十一年二月二十日新子規像が生れるホト、ギスの御連中もその他子規居士すうはいの方々もおやつと思ふ事になる。さてついでには展覧会へ出品する画像のモデルに私を選んでわけである（と云うわけは毎週土曜日の晩にNHKから私が川柳世相遠目鏡を放送してこれに興味を持ち声からの親しみを感じこの人を一つモデルにと思ったと柳丘さん

の告白）恐れ入るが力をお貸し願いたい出来たら川柳山伍健寺和尚さんの像と題して出品するとの事である。私は今迄一面識もないアメリカ帰りの画伯から選ばれ、たよられた光栄と同情をゴツチャにして考えた（心の内でこれはことわる方がいゝ然しどう理由をつけようかと煙草をふかし茶をがぶ／＼のんだその末に）いやどうも甚だうれしい事であるが私より外にいゝお方があるそれは子規居士の幼少からの友人で現在九十才でご健在の柳原極堂翁がいゝ是非この翁をかって出品して下さいと云うと極堂翁とは一面識もなくことわられるは必然としおれるので、でわ私が紹介状をかくからと早速かきその紹介状で翁は写真何十枚をとらせ数日は過ぎた。画伯

から礼状が来たそして展覧会へ出品したが世間によくある例の入選と決定しながら出品項目がないと折角新聞にまで発表せられながら極堂翁の肖像は包んだまゝ画伯が私の宅へいともしておれて申訳なさそうに持って来た。いろいろ慰めてその像を見ると実に立派な出来である。そこで私はこの像は極堂翁へ寄贈しなさいと説いた。それから数日たった、画伯から極堂翁は大変喜ばれついでに子規像をかりてくれぬかとの話も出たこのこと翁から私へは勿論あの画伯は腕は何はときいて来たつまり老人の念押しである。私は大丈夫とすゝめた話とは／＼と進んだ（こゝまでは川柳に何んの縁もない話であるがこれから相縁奇妙縁川柳と俳句の輪廻はなしになつて来る）子規の顔即ち三十六歳で亡くなった子規の顔を知って居るのは稀である極堂翁が今生の記念に若き子規像をあゝでないこうでないときしらずして今書かせないと永久にあの郵便切手や埋塔に線画で彫られた老人じみた子規より遺らない。句に歌に斗った子規は三十歳代の気魄に充ちた顔である坂井久良俊翁が日本新聞社時代に自ら二人曳きの人力車で出かけカメラ自慢でとった写真（子規目筆の裏書きある今各所に伝わる貴重写

真）も技術上本当の顔でない極堂翁の不満は若くいきいきとした子規の像を九十才の今日遺しておくべく悲願を起し決心して私に相談したわけである。月と日は経った柳丘画伯は図書館へ通いいろいろ参考資料を求めた極堂翁もきびしくさしらずに然し一つの壁にぶち当たったそれは頭部の毛髪ぐあいとはえきわの問題である古い写真では勿論判らない極堂翁も思ひ出せない数日は経った。しかし天は苦心を助けるものである。極堂翁の宅へ出入する青井氏がいつか三津浜警察署長を訪問した時この取次ぎに出た坊ちゃんが子規さんに似た人が来ているよい手が／＼となつた。青井氏は頭のモデルとなつた翁はさしらずに三人の協力はこれだこれで子規の頭だと出来上つた。さらに数日経過二月十九日子規会第一五七回の席上で子規居士の若き即ち三十六歳で逝去せられた壮年顔の子規像は出来上つた。この席上柳原極堂翁は目に涙をたゝえ声をふるわせて何さま六十何年前別れたのでこの像は似ておらぬ然しよく似て居る眼も口も鼻もよく似ておる地下の子規は要らぬ事を極堂はする例の横顔の郵便切手の写真をあゝの当時虚子はわるく批評したがおれはあれで満足して

おる然るに極堂は………てな事を言うかも知れないがわたしも本年九十歳である。いずれ近い内に子規に会えるその時まあさういふなやあゝせねばお前の姿は年寄りみたものに誤り伝えられて本当の姿は誰も知らぬまゝ伝えられる、それが友人として残念じゃけんいゝ機会に遺したと子規に話すつもりだと話された（この話中一座しんとする）二月二十日これを県庁と市役所へ寄贈し郷土館と県民室へ掲上される子規堂へも私の子規庵へも都合四面出来る私は満足である、新らしき子規像はこゝに昭和三十一年二月二十日生れ極堂寄贈の自筆で掲げられた。久良俊翁と子規その写真それから子規と日本新聞柳増藤井紫影西芳重山人紹介あつせん柳縁と俳縁の結び久良俊翁のとつた子規写真の貴重さと句と歌と柳の關係それから六十何年後子規の友人柳原極堂翁と新肖像と私との（この間他の俳人は誰も介在せぬ）俳縁柳縁の結びしかもこれを発表するのが俳人ではなく川柳人の私でありこの川柳雑誌である何んと妙といえないであらうかこの縁は——（終）



日僑俘に寄す

大井正夫氏へ

東野 大八

姫路の大井正夫さんが、昨秋ひよこり岐阜に現われ、十何年ぶりの対面をした。

相変らずの大きい声で、剣客みたいな面構えもさして昔とかわらなかつた。この声や顔を眺めていると、私はそのかみの新京の生活が胸底からうずくような郷愁をさそってわき上るのを覚えた。こんなたくましくあぶらぎった人の貌を前にしていると、片手を失くした私というひねこびれた人間は、ある種の生甲斐をすら覚えてくるから妙である。

若いころから、私は大井正夫の句がこころよく好きであつた。

你貴性江橋は梨の花ざかり
わらじぬぐやくざ言葉を使つて

二三人が四そりでなかつた酔うてやれ

などは私の愛唱である。彼はその風貌通りジャガイモの様に泥くさくて、ニンニクの様な太々しい

⑦モチ買つて下され黒河から来た

⑧歳だけの荷物を持った子は五つ
⑨下駄はいた満人の子とうちの子

⑩紅鼻緒丸刈の娘に歳をき

⑪ソ連去りし兵舎にナチのボタン
一個

これらの句を見ても判るようにそれは、敗戦のまじめな現実にもないアヴェンチュールが入りまじつたキナクさい生きものゝ記録といえた。①と⑩の歴史的悲哀感②の诗情③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩の人間の哀切④の人間の反響。なかなしく⑤のさり気ない一句は出色のもので、私の胸をうつ。

この句の作品は、要するに得難い時事吟的な要素を持っていた。それは面を変えていえば歴史的川柳記録ともいえる。この言い方を裏づけるなら、それは感傷におぼれず全日本人的な体験に訴える時事ニュースの表現様式をとっているということだ。海外引揚者でない人々にも作者の訴える現地の気分や現実がよく判る。随

て同じ立場の引揚者が鑑賞したら、それらの句は一層の切実感をもつて感銘深く心に迫ることだろう。⑤の句などは殊に秀抜で、一見ユーモラスなその表現にこそわれわれの様な同じ環境にあつたものにとつては千万無量の求訴力がある。

川柳に限らず何の話でも同様だが、実感の共鳴ということが大切である。句の場合、この要素が名句を生む素地ともなる。

私の句に「死にかけた話他人は笑ふなり」というのがあるが、これは本人の悲劇が他人にとつては一興興味深い喜劇であつた、という人間の持つ心情に対する私なりの批判の場であるわけだが、これを具体化した句とすればこの一句は死んでしまふだろう。抽象的な全人格的な表現であるため、この句の鑑賞には共鳴点が生じたのである。いうなれば実感とのズレ違いへのヤユである。

大井正夫の日僑俘は、一句一句が具体的体験句によつて構成され、それを通読鑑賞することによつて、日本人である人間すべてに對してドキュメンタリー風の共感を得た。客観的表現の強味がそこに色濃く感じられる。だが、これはこれで言うところなしと私は片づけるのだが、その実何故か今一つのあきたらなさを心のどこかで

私を感じとるのはなぜだろうか。それはこの作者のジャガイモの人の柄のなせる所以ではないかと思う。生々とした新鮮な生命力がそこにはしい。それは、そのものズバリで言うならば、乱離もたぎ

らぬ異郷での死との対決の最中に、悩み脅え考え苦しんだ素裸の作者の姿なり心なりがそこには語られてないということである。

作句は主観の結晶である。だが独善唯我の主観の作句は世の鑑賞にたえないため、その価値はない。共感なり感銘があつてこそ句の生甲斐があり、文芸の生命がある。日僑俘はその点文句なしの及第点は得られるだろうが、しかし幅の広さはあつても底の深さがないのである。ひょきょうそれは単なる川柳形式による現地ルポに過ぎなかつた様である。主観の透徹があれば、句は表現様式の工夫一つで、底知れないニュアンスをもつて人の心をうつ。そこにはすでに生きた主観はなくユニークな文芸作品が誕生する。

どん底にうごめく生きものゝ記録の、死を前にしたころのゆらめきをもつとどんなに追及したなら、この句稿は後世に残る事だろう。生きた日僑俘への精進を、以上の妄言をもつて大井正夫氏に期待したい。

川柳雑誌社特製
投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇〇円
送料 八円

患

者



北川春巢

一、診察

「私の川柳は医者より古いのですよ。」といつも云うのだが、川柳の方はやはり医者のようにはい

かない。本職の診察中川柳のことばかりも考えてはおれないが、川柳的に診察が出来たら面白いのにも思う。

診察に背中の方の灸のわけを云い

春巢

などはユーモラスな場面だが、勿論診察中に出来た句ではない。

艶のある肌へ灸師が熱さ問う

トン坊

これもスケッチの句であるが、句主は灸師なのであろうか、単なる想像の句であらうか。とも角此の方が前の句よりはユーモアの外に艶っぽさがあるてよい。

全身に此れも生んとす灸の跡

天保銭

などに至っては、いた／＼く見ていけない。が内科医としてはよく見る図だ。

名医の診察フン／＼とすみ

栗

これが本当の名医であって、私もこうありたいと思うのだが、私の診察はどうも喋り過ぎて漫才になつてしまつてゐる。横で人が聞いてたらそれこそふき出すだらう、と我々が苦笑することさえある。

「いつからどうお悪いのですか？」

「ゆうべから胃が痛うおまん。」

「下痢はしていない？」

「下痢してます。」

「何回位？」

「今朝から三回いきました。」

「何か悪いものか変わったもの食べたん？」

「何も悪いものや変わったもん食べしまへん。家の者と同じもんを食べて下痢してるのは私だけですね。」

「そやったら食べ過ぎと違つか？」

「食べ過ぎたんかも知れまへん。」

これで診察はついたわけだが、どうして／＼「フン／＼」どころではない。又時には、「食べ過ぎもしやしません。」と来るおっさんもある。

「酒の飲み過ぎと違つか？」

「酒なんか飲みやしません。」

「焼酎は？」

「焼酎も飲みやしません。」

「焼酎でも飲みそうなおっさんである。」

「ビールは？」

「ビールやったら飲みました。」

ゆうべお人が来て二人で半打あけましてん。」

患者とは、何もかも訊かねば云わぬものである。はじめから、「ビールを飲んで腹が下つてゐる」と云えば簡単であるのに……

診断はついたが聴診器は型の如くに当てなければならぬ、聴診器を診るなと思えども

光郎

こんな句を思い出す。成程、診断がもうついてしまつていれば、あとは形式的に聴診器を使うだけだ。患者の方はとくにその事を感知してゐるのであらう。開業医の中には或は此の句のような人があるかも知れない。然し私の診る患者は健保患者ばかりだから、全部無料であるし、病院から往診に行くこともないので、こんなふうな痛くない腹をさぐられるおそれのない事は、何と云つても有難いことだ。これも健保のおかげだが、今度健保の制度を改正して、診察を受ける度に患者は料金を払わねばならぬようにしようと企てられてゐる。これで健保では食べられなくなると云つて、保険医を一斉に辞退しようといふでいゝる医者もある。

とまれ診察室内では私は一寸ない病氣と聞かせ庸医なり

湧三

の余俗がはしいものと思つてゐる。

二、診断書病患者

近頃ノイローゼと云う言葉が流行におくれをとらずノイローゼ

梨里

病氣は昔からあつた病氣で、日本語では「神経症」と訳していた。近頃ではノイローゼと云つた方が通りがよい。ノイローゼには色々の症状があつて、一見多種多様のようであるが、元をたゞせば自我中心の浅ましい心が原因になつてゐる。「自分程可愛いものはない、」と意識的にも考へてゐるが、ノイローゼは潜在意識に属してゐるから、藤に隠れてゐるので自分でもその存在に気付かない。そして意志には従わぬ自律神経を介して表面に現われるのである。或る事柄に対する願望や恐怖が非常に強度な場合には、普通常識で説明のつかぬような症状を現わして来る。例えば災害神経症に於ては、災害のために頭を強打した場合が勿論、そうでない場合でも後になつて頭痛・眩暈・動悸・胸痛その他の症状を訴えて医者の方へ来る。充分な検査を行つて見ても、どこにも変化は認められない。一程度の賠償金を貰うと、こ

これらの症状はケロリと治ってしまふが、その金額が希望通りのものでない、決して治らない。学者はこれを賠償金欲しさのためであるとして、一名賠償神経症とも呼んでいる。戦争神経症と云つて、

第一戦の戦場の中にいると首が曲つてしまつて、どうしても真直ぐにならぬのもある。これでは使ひものにならぬというので内地の病院へ送り還されると、治つてしまふ。これは第一線での砲弾の音などに対する恐怖と、内地へ還りたという強い願望とのためであつて、自分でわざと首を曲げているのは決してない。自分で如何に首を真直ぐに伸ばそうとしても、自律神経は意志に従わないのである。

災害にかゝつたでもないのに、前記のように頭が痛いの、胸が苦しいの、心臓が踊るのと、色々な神経症状を訴えて、一人の患者が私の所へ来た。便を検査し、尿を調べ、赤沈をやつたが全然異常は見付からない。はては「胸部疾患が隠れて存在しているのかも知れぬ、胸部のレントゲン検査返りましょうか、」と私の頭は混乱して来た。レントゲン写真は撮影をしても、結果はその日には判らないので、今度何日に来い、と云ふことになる。こゝに於て患者は

「診断書を下さい。」と云う。此の言葉に私はハッとしてやつと診断がついた。私の頭を混乱させていたのは「診断書病」なのだ。診断書外で女が待っている

春 巢

つまり愛人と何処かへ遊びに行くために、不心得にも病氣休業の診断書を買ひに來たのである。患者は此の場合、痛くもないものを痛いと云つてゐるのでは決してないのだ。「是非とも休みたい。病氣になれば診断書が貰えるのだ。」と病氣の願望？が強い場合には、自然とそこが痛んで來たりするのであつて、熱も出るこ

とがあり、これもノイローゼの一種である。私はこれを「診断書病」と呼んでいる。

本病は若い人の罹り易い病氣で、大学教授でも一寸此の診断はつくまいと思つてゐる。と云うのは、こんな患者は大学病院へは行かないからである。

三、写真病患者

これもノイローゼの一種で、胸部のレントゲン写真を撮らなければどうしても治らない患者である。微熱が出る、寝汗が出る、胸が痛い、はては咳が出る、痰が出るなど、結核そっくりの症状を訴えて受診する。風邪引きだ位で帰らせても決して治らうとしない。

どうしてもレントゲン写真を撮る所まで持つて行かすのだ。そしてレントゲン写真を撮つてさへやればケロリと治つてしまふ。写真の結果を聞きに來ない患者さえある。これを私は「写真病患者」と呼んでいるが、これは強迫神経症の中の疾病恐怖症（結核恐怖症）と云うのに入つてよいと思う。友人か知人か結核に罹つたような人がよく罹る病氣で、その友人の通りの症状が現れたり、又は本で読んだ結核の症状がそのまゝ現れたりする。

本病の診断は比較的た易く、又治療に至つては前記の如く非常にた易いのだが、こゝに健保の難関がある。前には健保を礼讃したのだが、今度は健保のやりにくいことを云わねばならない。健保は病氣ならば、自由に無料で治療してくれぬのだが、事実「写真病」という病氣があるわけではなし、「神経症」位の診断名ではレントゲン写真の代金を病院に対して支払つてくれぬおそれがある。「感冒」とついても、感冒に何故レントゲン写真の必要があるか、と云う訳で、不必要な治療に対しては代金を払つてくれぬ。従つて患者は健保から写真代を受取らんがために、此の患者に対して嘘の病名を書くことになる。健保は書類の上だけで辻褄が合えばよいの

で、此の場合「肺結核」と云う病名をつければ一番無難であるが、それは医者の方の良心が許さない。仕方なく「肺門淋巴腺肥大症」位の病名をつける。実際に於て肺門淋巴腺の肥大は屢々見られるし、又大人に於ては肥大していても少しも心配はいらぬのである。つまり健保をごまかすことになるのだ。私は、患者の「写真病」を治してやり、ひいては仕事の能率を上げることが出来るのだから、此の嘘は許さるべきものと信じてゐる。

強迫神経症の中に「強迫観念」というのがあり、或る考えが現われると無意味だと知りつゝ、追つ払つても／＼それを取り除けることが出来ぬ場合がある。

恵二朗

タクシーに乗ろうとすれば、何だか衝突しそうに思えて、大型の中年運転手の、と車を探さねば気がすまない、と云うのである。不潔恐怖症というものは、便所から出て、何度も何度も手を洗わねば気がすまず、手洗いに半日程もつぶしてしまふ患者があるが、たくわんをタワシてこするノイローゼ

みるのろなども不潔恐怖症かも知れない。「癖癖症」と云つてもいい、だろ

私の云う写真病患者は、結核恐怖症に罹つてゐるわけだが、疾病恐怖症でその他に多いのは、癩病恐怖症や梅毒恐怖症である。ノイローゼ何か病氣を探さう

方 正

句主の方正博士は、患者の心理をよく見抜いておられると思う。疾病恐怖症とは云うものゝ、一方から見ればレントゲン写真まで撮つて病氣を探し求めているようにも思えるのだ。耳鼻科方面にも（方正博士は耳鼻科医長である。）こんな患者は多いと見える。病氣を探し求めるどころか、自ら進んで病氣になる患者もある。

案の定神経やみが先ず中垂り

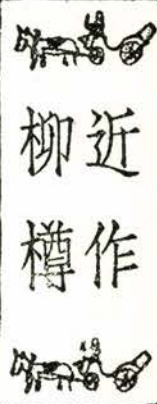
かつみ

同じ物を食べても、少し腐りかけてゐるのではなからうか、と思へば食べた後で下痢などを起し、又事実腐りかけてゐるのでも、何ともないと思つて食べれば何ともないことがあるが、此の句はそんな場合を諷んだものである。

写真病から話は妙な所へとんだが、ノイローゼにはまだ／＼色々な種類がある。然しこのへんで筆をおくことにして最後にもう一句ノイローゼの面白い句をお目にかけておく。

人間ドックに入れてもやはりノイローゼ

春 雄
(二月二十五日、稿)



麻生路郎選
北川春巢選

石川ひさみさん帰阪(二句)

母ちゃんも坊やも黒う丸く肥え 大阪市

乾杯をしようかとバーのドアを押

しまい風呂嬉しくもない噂きく

浮気してやろかと思うほど逢わす

平凡な愛情それを妻と言う

お風呂屋にテレビが出来、風邪を引く 山口県

昇坑の空気はうまいことうまいこと

水経の跡うるわしく断られ 大阪府

おつめなさいとは言わす 大阪府

寸暇を惜んで彼氏のものも編み

爐を切ってから晩酌が長うなり 神戸市

爪染めて退院近いサンルーム

笑われる恋が淋しい三枚目

イエスマン意外なとこに敵があり

サンドマン天職でなし今日も暮れ

泥ん子を叱らず泣いたのを叱り 松江市

ぶらんこは恋をしている脚線美

よい縁談あってこの頃ながい風呂

板東千代美

同

同

同

同

安平次弘道

同

同

同

同

小浜 牧人

同

同

同

同

舟木与根一

同

同

同

沢庵を褒めて都会の客が去に

ベニヤ板たるみ成金ひだり前

元旦と云うても矢張り古昔広 大阪市

飲み足らん顔が年始にやってくる

成金と一目で判る応接間

酔いどれのくどさにまけて腹をも

何とも思ってもやっぱり年令でんな

復職の話へ窓の陽が温くし 兵庫県

盃を持てば課長もこせつかず

紙芝居宿題の子が落ちつかず

学校で教えぬ化粧が上手なり

煉炭が惜しくて無駄なお湯がわき 愛媛県

燗びんで一本父と子と母と

炭のいるアイロンながら錆びさず

屋の月にどっか似ている病上り

帰阪して

一階からネオンの見える懐かしさ 大阪府

落ち着いた大座敷の向きもかえ

帰阪して見ればふるさと又恋し

表札は又叱られる名を書かせ

恋人を乗せればベタル軽くなり 石川県

催促に行つて洋傘忘れて来

借金に抜けず姐さん格となり

良い話火鉢へ炭を足して聞き

蛇の目さしても師匠踊りの型と 岡山県

停年の父に小唄を奨めてみ

雪の日を口三味線ですらえする

舞扇納めて母の顔となり

同

同

榎本みのる

同

同

同

吉原 紅月

同

同

同

同

村上 旭童

同

同

同

同

石川ひさみ

同

同

同

中松 恒雄

同

同

同

小田 紫草

同

同

同

同



幸福を幸福に (五)

戸田古方

真実なるもの

夫る二月十一日、川柳雑誌二月号(三四五号)の句評を本社句会でいたしましたが、この稿はその時の大要です。

川柳塔にしばらくぶりに生々庵さんの投句がのり始めて数ヶ月、今月号の一句から先ず、

この無理を聖天さまもてあまし 生々庵

生々庵さんは息の長い作家と申しますが、これなど定型の十七音字におさまりながら、字余りでないかと思わず指を折って見ました。路郎先生の前著「新川柳講座」に

俺は医者だをして母の子でもあり 生々庵

新著「川柳とは何か」の子猫そろそろみな宿命の顔かたち 生々庵

前者は十八音字、後者はこのまゝでは十九音字、そろそろを二音つとめるとやと十七音といふところす。

持ち味というものはおかしなもので十七音字におさまっていてもなお字余りでないかとの錯覚をお

同	同	同	半田	同	同	同	野田	同	同	同	辻	同	同	同	中島	同	同	同	本多	同	同	同	士守トシ坊	同	同	同	徳永
			夏生				一念				圭水				可十				省三							貴美	

田淵	正平	同	同	岩川	一貫	同	同	前川	左文字	同	同	竹内	花代子	同	同	池上	知恵美	同	同	坂本	阿季良	同	同	藤田	凡々	同	同	堀	須賀太	同	同	仲ど	んたく	同	同	津田	千舟
----	----	---	---	----	----	---	---	----	-----	---	---	----	-----	---	---	----	-----	---	---	----	-----	---	---	----	----	---	---	---	-----	---	---	----	-----	---	---	----	----

桃谷順天館

こさせています。そうした個性を残したまゝで定型にもどつてこられたのも年期というべきか、枯淡の境に進まれたというべきでしようか。

しかし私がこの句をとり上げたのは句の外型だけでなく内容の方でありまして、凡俗な題材の中に見出す悟りであり覚りであります。

無理とは何か。楠正成の旗に「非理法権天」というのがあります。が、非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は天に勝たずと読むのでしょうか。この場合の非は無理と同じ意味に解せると思いますが、無理は真理に対するもの、真理は神仏に通じ、無理は聖天さまをもてあまされずにいられすまい。

「心だにまことの道にかなひなば祈らずとも神やまもらん」 た



ストバヤリ ストイースト ストライ、のあり

(回復も春日遅々というカルテ

スト流行りゼネオネ ストリップ

子供連れで来てあつさり借りらる

掃き寄せたごみそのまゝで寝正月

仕立替え染め替え妻の忙しさ

太く短くが三面記事になり

奈良にて

えさ代がいります奈良の写真とり

ハネムーン女は雪をほめている

親の計になかぬ女が恋に泣く

チョンガーが夫婦の縄解く係

借りた子を返して夫婦黙り込み

酋長の追分に聞く波しぶき

ミスアイヌと聞いて情熱的に見え

フラツシユがアイヌ婆ちゃん脅

逢う気無からハンカチ振って

自家用の夫人PTA幹事

会葬に手当百万あるうわさ

美術展彼女にセンス試めされる

泣き言を言わぬでうたがわれ

酒の徳といてケチ／＼酔をのむ

髭剃ったことに気づかぬ妻となり

女には惜しいと度胸だけをほめ

酔えばすぐ酒つぎまわるだけの芸

不器用が卓球台の虫となり

詐欺犯はへらへら笑う顔を持ち

大書して当選出したくじ売場

高知縣

大田市

岡山縣

会敷市

岡山縣

日野市

兵庫縣

兵庫縣

大田市

大田市

大田市

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

旧暦も覚え左遷の日々となり

各停でゆっくり帰る天の邪鬼

平仮名に似てなで肩のよい女

バスおりてからしんどい石の段

気に入った顔で別れるのが見合

お茶漬が悪いと医者殺生な

プロバリン相手は女念を入れ

保険金ほしい家だけ燃えのこり

子に投資などと口が少し過ぎ

たまさか早起き日めくりめくり

目に毒と言うてやっぱ見せた

一見に如かずで衆議一決し

庚かんで居る間にキスの場は消

ふぐちりに命の惜しい人が寄り

猫柳母のセンスで活けられる

指に唾つけてマダムはペーじ繰る

厄除と恋も一緒に頼んで来

女学校出して二号にさせよとは

大色魔とも気がつかず絞られる

女酒競輪今では釣に凝り

年金で煙草一つの世を恨み

耳だけは駄目になったと米寿翁

振込んで欲しいポケット逃げ廻り

へそくりをさがす板間よくきしみ

炭焼の煙もやはり春の色

未だ生きて居たか住所のない年賀

紅一点何かの音に振り向かれ

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

群馬縣

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

しか明治天皇の御製であつたかと

拝しますが、この境地はほんとう

だと思ひます。聖天さまならずと

も無理な、まことの道にかなわな

い祈りにはそっぽをおひきになる

のじやないですか。

迷信も真剣なれば笑われず

千容

迷信をいがいに無理ともいえま

せん。科学がまだ万能でないこと

は科学が日進月歩していることで

あきらかに証明しています。鰯の

頭でも信じたら大きな力になるこ

とがあります。私たちにカロリ

をあたえて下さった大恩のある鰯

さま。こぼれおちた鰯の眼からも

後光を感じた句が美の柳人水谷鮎

美さんの作品の中にあります。

仏性の土にこぼる、鰯の眼

鮎美

名医は科学を超えて治します

し、コロンブス以前に地球がまる

いということは立派な迷信でし

た。

腹立ちが自由に出せる地位と

なり

腹の立つ時にラジオのチャッ

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子

花代子



悪妻だと思ふが波風立てもせず
なでて値を聞く楽しみの洗濯機
イヤリングの方が恥かし顔のしわ 大阪府
禿げ具合それが好きよとぬかしち
門札に亡夫の名前まだ残り 東京都
人口は三面記事は減るばかり 玉野市
禁酒禁煙して友人にうとまれる
竹細工今日も忙しい模範囚
巡回の映画裏側からも見え 熊本県
謝近火御見舞広告のチャンス
表彰のカメラへ笑顔強いられる 奈良市
寝不足がもたれ合つて通勤車
遠慮しいく遂に飲みつづれ 鳥取市
職安の焚火女へ輪をあげ
牡丹雪紙治のような頬冠り 大阪市
バス待つ間日向ボッコのベンチあり 金澤市
丹前の社長目白の餌をすり
長病へきれいな指ねとはめられる
かみそりもハサミもといで日曜日 松阪市
肩車石けん箱は子に持たせ
三文を損する覚悟の日曜日 新居濱市
ぶつつけた様に寝て居る薬風呂
借り着とは知れず皮肉にはめちぎり 天理市
六頭身八頭身の服を買い
友達に逢うて焼芋買いそこね 天理市
仏壇の前で反省せまられる
倦怠期妻も無口な読書する 岡山県
母さんの叱言と知っても居らず

同 岡島 孤舟
同 下岳 周村
同 星川 陽石
同 吉村 一舟
同 絹下 南天
同 北村 三步
同 加川 大然
同 松永 恒青
同 萬濃 修
同 加藤 向水
同 岡田 梅林
同 仲野花鶴美
同 矢内満寿子
同

あいて通路に立ったイヤリング 兵庫県
物言わぬ娘の接待に疲れたり
故里は振子の音も疲れはて 東京都
情熱の去りゆく音の静かなり
老眼鏡ロートベニマイにも縋り 熊本県
陽春という日曜をブランなく
ソバカスの数を減した仲人口 米子市
男には覗いてみたいハンドバッグ
日記帳詩を書くようになった次女 岐阜県
宗教にこの頃凝った社長訓
鍋一つ出すいかけ屋もなじみ待ち 神戸市
有るところへかく銀行貸したが
美人は夜つくられる描眉毛 伊丹市
七光りなどと言われてちと不服
停年の時が十五と妻産む気 宇部市
後家さんの噂で行商良く稼ぎ
愛情の自信は二号の方が持ち 鳥取県
栄進は望まず一言居士でおり
まだ深い傷もしないで株を持ち 米子市
飲むことの価にして妻は靴買わせ
番号を打明けられる程に病み 貝塚市
背ボタンを坊やにかけママ若し
退院の下駄長い廊下にこだまする 岡山県
プラトニックマスクのままで戻つて来
頼りない男大きなアクビをし 岡山県
臨終の二号を本宅見舞に来
日曜大工結局ママが出来ただけ 出雲市
干拓の噂へ蜷惜しまれる

永尾 英断
同 川端 柳風
同 淵川 秀敏
同 福代天邪鬼
同 加納 幸児
同 傍島 静馬
同 小川静観堂
同 平田 実男
同 田中蛙眠子
同 湯原 一机
同 護川 梢月
同 富池 茂人
同 岡崎 一也
同 石橋万古人
同

あるともいえます。これを面白い
と見られるようになったらしめた
もので、その中に溺れている間
は感じられないのです。機会を
得て、ある距離をへだてて客観し
得る立場、事件の主人でなくて見
物人になりさえすればそれでよい
のです。芸術は宗教に通じ、宗教
は芸術と発現します。三昧の境で
す。そこに立つことを幸福の鍵
です。

もう一句

騒音に慣れて真実聞けぬ耳

北海

真理を無理とすりかえてい
るが常識の世界、しかし電車の中
で案外読書三昧に入れたりします。
常識を裏がえしますと歎異抄の
「善人往生すいわんや悪人をや」
の心がすなおにすらりとわかつて
くるのじゃないですか。

人生の幸と不幸のわかれ目は幾
分でも慾望の主人になれるか、い
つまでも慾望の奴隷にあまんじ
るかにあるのではないでしょうか。

平凡の中に非凡、慾望の中で慾
望を超える。心配しなくつたって
喜怒哀楽に無感覚になんぞなりや
しません。親鸞聖人は「とても地
獄は一定すみかぞかし」と嘆かれ
たように、私たちは慾望の囲いの
中から、生きている間は出られそ
うにもありません。せめて自分が
そうした囲いの中にいるという自
覚をもつこと、たとえはかない憧
れにすぎなくともその囲いの外の



子の嫁に遠い昔を思い出し 奈良県
空想は高いがやっぱり端役なり 松江市
春遠からじ運勢どおりゆくとときめ

闇米がある防犯モデル地区 大阪市

入れあげた金をふられて計算し 大阪市

易に出たロマンスもなく三十過ぎ 同

尾を下げた犬に出くわす十二月 大阪市

廻り椅子清濁併せ呑む笑い 同

金の無いお方に見えぬ肥りよう 平田市

鶏四五羽飼う気日曜釘をのし 同

学芸会ママを探してちとちり 天理市

相談欄お伽話の様に読み 同

孝行の真似を石段させてくれ 宇部市

ハンコおす丈の課長で肩がこり 同

親馬鹿が三十息子を甘えさせ 大阪市

堅人の婿を親爺が煙たがり 同

舌鋒のするどさに似ず細い指 鳥取県

文才があるので変りものにされ 同

台所直すに家相見てもらい 米子市

玄関で帰すお客は妻を出し 同

愛妻家の隣りを例にしてねだり 岡山県

暴君と他人が云えば腹が立ち 同

伝言板関係ないのも読んでおき 広島県

アベックが隅へすわってよくもベリ 同

蜜蜂に養われ花見てくらし 青屋市

入学をたのみ就職たのまれる 同

当分は三日も着せぬ洗濯機 笠岡市

有る奴は医料費までも自慢にし 同

旧正のもちつき遠く風に乗り 豊川市

木村よしを

同

小林孤呂二

同

三好 澄泉

同

橘高薫風子

同

久家代仕男

同

菱田 満秋

同

糸永 風柳

同

西川 晃

同

鈴木村諷子

同

八杉 風車

同

宗森とも子

同

山田スミ子

同

黒田一十

同

木山 二路

同

堤 ちる

同

約束も反古に雪の日コタツ番

同

ピンぼけへすまない彼女の片えくぼ 岡山県

着ぶくれのベタル寒げいに越え 同

葉葉服背広の主に貸があり 七尾市

託児所へ預けて今日もイヤリング 同

上役と争うこともかう若さ 大洲市

かすがいの様に言う子は母の側 同

婆々と呼び爺々と呼ばれて長生し 青森県

無理算段さ笑くぼがつきまとい 同

満足と云う顔付きの千鳥足 倉敷市

髭が伸びて居るよと孫に注意され 同

嫁き遅れ女史と言う名が社で通り 倉敷市

手不足が息子の縁談早くさせ 同

鉢巻がすべりそうな迄に禿げ 倉敷市

寝化粧で女に還る女社長 同

平机一輪さしもじやまにされ 大阪市

帰る父待つ子に寝る子大晦日 同

飲むための会に変わって続いとり 兵庫県

大雪を押して帰った我家の灯 同

速い足褒めて使いに出してやり 兵庫県

ふといこと言うが出しぎたない男 宮崎県

寒空にタクシーばかりが走りすぎ 兵庫県

酒も断つ長生きの手を払い除け 広島県

ニコソンのシャベルに春の陽がこぼれ 鳥根県

熱心の筆記と見たは似顔かき 川西市

雪降れば降ったで子等は家に居ず 大阪府

突然に帰って里の庭を掃き 香川県

春風と北風おなじ社宅でも 宇部市

値の好きに鯛の味をば感じたり 大阪市

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

世界を考えてみるぐらいの事でも

出来たら、その人の人生は大成功

だといわねばなりません。死な

ば浄土に生れ得る幸せの一生であ

ります。

生々庵さんの定型への立戻りか

ら話を切り出しましたのも、そう

した平凡の非凡を考えたからであ

りました。

欲望をエンジョイする世界。慾

望にブレイキをかけられる人生、

死後のことは私も知りません、信

ずるほかに別の子細のないことと

して、こうした希望のもてるのも

つまりは人間慾望をもつていきる

からできることで、慾望をこゝま

で清め、押上げたいものです。互

霊仏性ありというのはこゝのこと

でしょう。

とにかく川柳は幸福建立のため

に精進せらるべきものと信じてい

ます。一九五六・二・二六

ぬかぶくろ

安川久留美

「娘」からズロースを買って来て

くれと依頼を受けた老母が、直ぐ

さまDデパートに赴き、「ロース

を下さい」といったら「ロースな

ら肉屋へいらっしゃい！」と女店

員があつさり答えたとの実話があ

る。「ズ」の一字をのみこんで

「ロース」といったのは微苦笑も

のだが、昔歌舞伎礼讃——大向う

の声に六代目(菊五郎)に「ロ



- 母だけが喋り見合が済んじまい 笠岡市
 合づちと別に視線は美女を追ひ 大坂市
 円満の棚にホルモン見つけたり 香川縣
 M過剰あんなお顔で片えくぼ 貝塚市
 相性が矢鱈気になる倦怠期 貝塚市
 安静へ子も聞きわけている絵本 天理市
 末の娘がチヤッチャッチャで起きて 大坂市
 内職の背なで子供は寝てしまひ 岡山縣
 しきたりと云う中で嫁苦勞する 京都府
 火事見舞オーバの襟をたてて訪ひ 神戸市
 運命にさからい子にはさからわれ 山形縣
 貸本を読む金無しの日曜日 大坂市
 友の死がグットこたえる齡になり 宇治市
 臨終を上げます声へシンとする 貝塚市
 手紙では母の白髪も気がつかず 岡山縣
 仔山羊鳴くフト郷愁がよみがえり 岡山縣
 ロマンスグレー論も出て来、教務室 新潟縣
 行先もないのに別れるなどと言ひ 貝塚市
 詰め寄れば一步退く恋であり 和歌山縣
 御機嫌もうかりまつかと松屋町 大坂市
 優勝と予想をきらう本場所 兵庫縣
 子の安否気付かう母の無筆にて 宇都市
 膝枕さしてゝ家では敷かれる身 倉敷市
 独身は独身同志の同窓会 神戸市
 放送は清天窓の牡丹雪 貝塚市
 就任の挨拶ちよと節をつけ 岡山縣
 教職をとちる程派手に恋愛し 倉敷市
 抵抗もなく指名犯繩につき 大坂市
 子をあやす時は無口もさしやべり 今治市
- 佐内 隆文
 山本 立児
 香川 雅人
 津田乃武康
 小田 柳叟
 久米奈良子
 稲葉 好子
 杉本たつよ
 塚脇 笑太
 飯尾寄与史
 菊地 白葩
 堤 勝三
 柿本 古竹
 小島さぎす
 大石 一久
 舞島 白露
 高野むじな
 奥村 芳城
 岡本 三楽
 木村 喜男
 斉藤 鴨丘
 上杉 雪峰
 藤沢不二郎
 佐野盛気楼
 阿部かつみ
 岡 一門
 山本 閑人
 大西 斗牛
 越智 一水
- 親の目にも息子にすぎた嫁が来る 豊田市
 入歯だと知ってキッスの味も消え 大坂府
 春闘を笑って見てるオートメーション 富山縣
 下駄を脱ぐことにも恋は氣を遣ひ 笠岡市
 ため息は路傍の石にけつまづき 高知縣
 下肥の匂う野道のランデヴー 高知縣
 赤ん坊のミルクに爛はまたされる 和歌山縣
 飲みつ振りは李白も汚職も同じ 和歌山縣
 書く程に行かす作家の口ごもり 石川縣
 へそくりが出来た目で見える投資欄 宇都市
 どこの児が落した玩具か雨にぬれ 尼崎市
 記念盃また元旦に取り出だし 尼崎市
 胸さわぎあつたと事故で教えられ 大洲市
 終るまで笑顔で話す貰ひ乳 大坂市
 祝儀ものだと阿呆らしいを買ひ 大坂市
 氣休めのまじないをして母は去に 吳市
 名を遂げて晴耕雨読板につき 大洲市
 お供えのお菓子誰かにすぐ引かれ 尼崎市
 第二でもかけるとラジオうるさがる 笠岡市
 私もうおばあちゃんよと若やいで 笠岡市
 会うためにマスクの下の濃いルージュ 今治市
 美人薄命などと女給のうぬぼれて 大坂市
 いびつなる我が人生に悔ひ多く 豊田市
 泣きだけ泣いてルージュは別な顔 岡山縣
 迷惑を知らぬ男でよく稼ぎ 倉敷市
 見本市結局高いものを買い 松江市
 立春が過ぎ放送も春めいて 大坂市
 工夫してはあきらめぬ子よ懸り風 豊田市
- 吉村たけし
 本村振氏梵
 島村 克児
 高木 洪柿
 北川真一郎
 島崎 秀保
 木下 一休
 前川桃源郷
 塩谷三思楼
 岩原 滔川
 林 澄子
 岸本 丹馬
 尾花 清美
 熊本 黄城
 雑賀 見勢
 青木 微醉
 堀内 曉風
 山崎さつ子
 木山 遠二
 出原 真奇
 越智 義夫
 松本 凉一
 金子 紀人
 沼田 三六
 荒木 狂風
 岡崎 祥月
 中谷ハナ子
 鈴木 淳

のにさも似たり?

この六代目で思い出すのは亡き
久良俊翁の旧作、

万朝の活字に似たる六代目
がある。万朝報は明治から大正ま
で続いた四頁の新聞、一般新聞と
変つた特長のあるあの活字を六代
目の舞台風姿に比喩した丈の十
七字、こんな句が百年後何のこと
かさっぱり難解となる、時事吟の
一例であらう。

七句以上の人々

志賀津世詩

川柳塔の三十年一月号より十二
月号までの一年間に七句以上抜け
た人を調べてみたところ、三十四
人よりない。姓名別にすると二十
四人である。一瓢氏が筆頭で四回
で三十四句、香林氏が三回で二十
二句、水客氏が三回で二十句、七
面山氏が二回で十六句、日満氏、
谷水氏が共に二回で十五句、潮花
氏が二回で十四句、あとは各一回
であるが、紫香氏、夜潮氏が十一
句で断然他を圧倒している。

八句組は文郷、夕鐘、方大、し
げお、葉光、梨里、牛耕の諸氏。
七句組は夏六、杏花、尋四、春
巢、麦太楼、北海、春雄、没食
子、芳仙の諸氏である。

新人の名が見えぬが本年はひか
平氏が堂々このベテラン連に食ひ
込まれてゐるのが注目される。
十一句ラインを破る人は誰か、
果して何人出るか楽しみである。



麻生梨里さんを

訪ねて

(女流作家訪問記14)

丸尾 潮花

川柳雑誌社の名編輯長としての

麻生梨里さんを早春の雨を突いて万代のお住いにお訪ねした。梨里さんは私が梨里ちゃんと呼びする程、どこことなく子供っぽいあどけなさを持っていられる。「さあ、これから潮花さんの訪問をうけるのやなあ、ハハハハ」と大きな声で茶の間から馳け込んで来て対座される程の気易い方である。

「せんだっての友の会の集りは皆さんから大変喜んで頂きましたが、今後は川柳だけでなく文化の交流を図る集りにして頂けたらと言う声があるのですが、どう思われますか？」

「それはいい事ですね。でも、あまり範囲を広げても其のために忙しい方に多くの時間をとらせてはどうかと思ひます。先ず川柳を中心として其の都度皆様色々な話題を持ち寄れば広がりのある集りになってゆくのではないかと思ひます。ただ句を作つて、さよなら来ない事がよくあります。たとえ

ば四畳半だとか、しんねこなどという言葉の意味はわかりませんが、さて作句すると言ふことになりま

すという意味だけではどう言ふことを詠んでいいのか判らないのです」

「そうでしょうね」

「四畳半や、しんねこは一つの例に過ぎませんが、他の題でもわからない事が可成りあるんです。そうかと思うと初心者の方は逆に雑吟が作れない様ですね。よく題を出して欲しいと言われますが、

それは何を詠んでいいか目標が無いから、題を出してあげると作れるのです。そうした人は無論初心の方に多いのですけれど、常に物に対する観察力が足りないの

で自分の身辺に幾つも題材があつてもそれに気付かれないのです」

「話は変わりますが梨里ちゃんが川柳を作られたのは何時頃からでしょうか」

「私……一番最初に作句したのは七つか八つの頃でした、お祖父さ

川柳は生きている

平岡利夫君の靈に捧ぐ

福田 丁路

ハイカーとならんて地蔵写される 京都 平岡利夫
ビルの窓何かどなつて見たくなり 同

先般古い「川柳雑誌」の句を拾ひ読みしていたところ、偶然にも右の句を昭和十五年七月号で発見した。平岡利夫と云えば妻の弟であり、去る大戦に於て戦死した者である。

私が結婚して十数年の間、京都にある妻の実家で過し、彼れを妻の弟の如く慈しみ、又彼は私を真実の兄の様に慕つて、常に私達の部屋に出入していた関係から、川柳の知識を得ていたのは知っていたが、彼に句のあつた事は全然知らなかった。

然るに死後十数年の今日に至つて、懐かしい彼の句に巡り合ひ、真に感慨深いものがある。性質は温厚篤実であり、研究心の強かつた彼の事であるから、現存していたなら、社会的活躍は勿論、川柳界に於ても立派な作家になつていたに違いないと思う。私は早速外にも彼の句が発表されていらないかと調べて見たが、二句以外は発見

出来なかつた。

彼は当時的高等商業学校入学試験準備で、過度の勉強が祟つて、胸を浸され長らく病床に就き、一時絶望とさえ云われたが、母の献身的な看護に依り、回復する事が出来たのである。然るにその身代りの如く母が病に倒れ、死亡するという悲しむべき事態に立至つた。

そうした中であつて、召集令状が届けられたのである。回復したとは云ふものの、烈しい訓練の前

ホップのきいた



アサヒ
ビール

んの年忌の時でした。一家で句を作った事が有りました。其の時のことを父（路郎先生）が古い川雑に書いていますが梨里は一番手紙を頂いたことをまだ覚えていました。

「七八つの頃にね」

「多分その頃、うちは貧乏やったんでしょ。今でもですが……」

と大きく笑われる。

「それ以来よくお父さんやお母さんの留守にうちの子どもばかりで句会、ごっこをして遊びました。欄間にいっぱいビラをさげて、互選とか霞乃選とか書いてね。生意氣に雑沓などという題を出したりして、お小遣いを出し合ってお菓子を買って来てね。お菓子ばかり喰べていて句はちっとも作れないんです。今にすると、うれしい思い出です」

「そうでしょうね」

「近作柳欄欄に初めて出したのが昭和十四年だと思えます。近作柳欄にすらりっとなる様になったのが昭和十八年頃でした。その頃の句に

（大食は現実主義と見られたり）
（ぶどう籠持は貧しさ繪の如し）
（袈裟御前私も欲しい心なり）
などです。それから、

（理想ですものだまって聞いててくれるでしょ）此の句が雑誌に出ですよ」と云えど

「あれは枝ぶりがよかったんでしょ」と笑っていられた。

「川柳以外の趣味は」

「日本舞踊です。小さい時には舞踊家になりたいと思っていました。日本舞踊はものすごい程好きです」と大変な力の入れ方である。

「今年の舞初めの松の縁はなかなか落ち着いた踊を見せて頂きましたが、どの様なものがお好きですか」

「儀式物などです。本当は女舞が好きなんですが、あのクニヤ／＼したところが苦手ですね」

「また川柳に戻りますが戦前は御主人が川柳家である場合の女流作家が多かったですが、最近では御主人に川柳の趣味が無く奥さんが川柳人であると言う方が大変に増えて来ましてね」

「戦前にくらべると女性も社会にふれる面が多くなつたせいもありましょうし、作品が以前ほど感傷的でなくなつたことも一つの進歩だと云えるでしょう」

「お忙しいところを色々有難う御座いました。梨里ちゃんと句や踊のお話をしていますと帰るのを忘れてしまします」

不朽洞を辞する頃には雨は更に激げしく降りしきっていた。

次は「直原湖月さんを訪ねて」

「でも、あの縁はとてもよかったですよ」と云えど

（女なる悲しみおんな酌をする）

「梨里ちゃんにはいい句が沢山ありますね。女なる悲しみなどは代表句でしょうね」

「でも私は私なりに好きな句があるんですよ」

（泣けば済む涙と見えし我が涙）

と言う句なんですけれど。えてして自分の好きな句はいいものが無いのかも知れません」

「そうしますと柳歴は二十五年位になりますね。それから、いつも綺麗にお花が活けてありますが何流なんですか」

「ウワー」と両手で顔を覆いながらおどけた表情で

「お花はうち流です」

「うち流とは」

「梨里流」などと笑っていられるのを突込んでお聞きすると

「中尾流です」と白状をなさる。

「でもほんの少しばかり習ったのです」と謙遜をなさる。

にひとたまりもなく、病が再発し兵役免除となり、又もや療養生活に入った。幸いにもその結果は良好で、再度回復の喜びを得たのである。ところが突如、誰れにも告げず軍属を志願して、遠くフィリッピンに渡り、終戦の混乱の中に消息を絶って仕舞った。軍属の志願を知った我々は、病弱な彼れの身を慮え取消を望んだが、時既に遅く集合命令が発せられ、如何ともする事が出来なかつた。

この様な悪条件の身でありながら、軍属を志願したのは当時の所謂、進んで困難に赴くという気持もあつたであらうが、自分の身代りとも云うべき、母の死の悲しみを紛らす、一手段ではなかつたであらうかと思うのである、

公報に依ると、或る飛行場に於て華々しく戦死したとあり、又一

方彼れと密林深く迷れたが、何時とは無く、別れ／＼となつたという便りを送って来られた方もあつた。私達としては、多くの者がそうであつた様に、彼も亦密林の中に倒れたものと思つてゐる。

こうして彼は、無暴な戦の犠牲となつたが、「川柳雑誌」に残したかの二句は、川柳道の続く限り消え去る事はないであらう。その後私が川柳に思いを至す總ての場合に、かの二つの句が脳裡に浮き上り、それと共に彼の面影がハッキリと眼前に現れる。そしてともすれば沈滞しようとする、私の川柳意慾に火をつけ、かき立てる。

私は今後彼の句をマスコットとして、一句でも「いのちある句」を創り、名も知れぬ南海の地にさ迷うであらうところの、彼の靈魂に捧げたく思うのである。（完）

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

福壽草

定価二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

電話 住吉（四）六〇八一



雑筆春秋

旅に拾う

築山快夢起

その一 阿寒行

北海道の旅の四日目、川湯温泉をバスで出発したのが午前十一時で、途中摩周湖の青く澄んだ水に神秘を感じながら、弟子屈温泉に着いたのが一時を少し過ぎた頃か、此処から阿寒湖までの里程四十二軒のコースは、土地では横断道路と称し、その大半は阿寒連峯の原始林を縫い、山腹の斜面を切開いてつけられたものだから、僕等のバスは限りなく続くエゾ松、マタービ、ダテカンバ等の樹海や、何百呎もあろうかと思われる溪谷美を恣にしながら進んで行くので、紅葉には未だ早かったけれど、全山の樹々には淡黄濃黄とりの秋色が周囲の緑に交って美しく、雄大の眺めは阿寒コース唯一のものであった。

バス道路に二台が並んで漸く通れる程度の広さゆえ、反対側からのバスとでも、行かう場合、崖まで二呎位を残して通るのだから、余り好い気持はしない。バスガールは「オーライ／＼」と連呼しながら、運転手君に注意を与えて居るが、車が滑り落ちない程度の「オーライ」だから、この所乗客は完全に貴重な生命を、運転手と

バスガールの両君にお任せして居るわけで、心細いこと甚だしい。途中二三箇所、堅牢な石垣で何十呎の崖が修築されてあるのが眼についたので、尋ねると其処は昨年、天皇陛下御通過の折に改築されたものだと言明があった。阿寒湖近くへ来て、ひどい箇所があったので、僕は「此辺も一度宮様か大臣にでも通って貰ったら好い道路になるだろう」と皮肉って皆を笑わせた。

その二 猫と茸

十和田湖からバスで毛馬内へ、毛馬内から好摩駅、更に東北本線の子午田から鳴子へ着いたのが夜の八時半で所要時間十三時間、鳴子駅で出迎いの顔を見た時には「ヤレ／＼」と思った。

此辺一帯は宮城県だからズーの東北弁も福島あたりよりは更に念入りで難解だ、子午田、鳴子間は時間の都合で三等車だったから、乗客は殆ど此地方のお百姓さんの町への買出しか売込の帰途で多くは四十才から六十才前後の婦人、何れもモンペ姿に竹籠を背負い、見るからに生活力の逞しそうな許りで、皆仲間同志ゆえ誰に遠慮が要るかと思ひ高談放笑の

雑感

長野文庫

所有台数四第一でパチンコ王と云われて居る日氏が糞尿汲取業を開始した。従来当地方の糞尿汲取りは無料か若しくは有償で附近の農家が直接汲取って居たが最近金肥の出廻りと農村の青年層が汲取りを嫌がる様になった為、有料の糞尿汲取りが事業として成立することに着目してこの事業を開始した訳である。それだけなら何の変哲もないが、同時に日氏は大規模の「まんじゅう屋」を開業したのである。この事業の取り合せが面白いので市民は「食わせて取る気か」「口から尻まで」「まんじゅうで肥料を増産する気か」など町の話題を集めて居る。

人間が肥料製造機にも見え

このまんじゅう屋が伸々よく流るので隣接の食堂の主人公も右へ習えして類似のまんじゅう屋を併設して競争を始めた。そして

ポデービルの流行の余波が今治にも押し寄せて来て学校、会社、団体などでも盛んに練習をやっている。先日でも之オリンピック重量挙げ選手白石勇氏の外、日本選手権保持者が二名同道で来今し今治西高校でその練習講習会が開催されたが多数の受講者があった。ところでポデービルで肉体改造も悪くはないが、これと共にヘッドビル

の必要もあろう。牛のような頑丈な肉体丈けでは動く巨木にすぎない。身体は健康と併せて健全な頭脳も必要だが、ヘッドビルには川柳作句がまことに好適だと信ずる。力強く腕すく高の知れたもの

「ワタ」と云う字はどんな字ですか」「一寸これへお欲びを書いて下さい」「悔み状の原稿を書いて貰えまいか」などと云って来る人が時々あるが、何れも町で相当の人物である。相当と云うのは経済的余裕の相当ある人物と云う訳である。これ等の人々の共通点に新聞以外に活字を見ぬ人であつて金儲けは人一倍上手だが、案外物知らずである。職業以外に興味を持って居る人は絶対にこんなことはない。川柳作句をして居る人なら知らない字は無いと云つても過言でない。この間も川柳を始め一年位経つ人が「川柳をやり始めて手紙が自由に書ける様になった」と云つたが、手紙どころか小説でも立派に書けると思う。力にはよるが智慧にはよらぬ皺

賑やかさ僕達まで釣込まれて和やかな気分になるのであった。僕は此人達の会話の中から何か捕えて見ようと思つて注意したが、何分耳馴れない訛りが多いので仲々案ではなかった。

すると其中の一人が異様な形をした茸の籠一杯あるのを皆に見せて、其れが食用に適するか如何かを尋ねて居るらしかったが、此地方でも珍らしいと見えて誰も其れに明答を与える者がなかった。

やがて仲間中での年長と思われる老婆が、経験上からか面白い事を云つて珍茸のタイズに解答を与えた。彼女の語るところを意訳すると

「そんなのは先ず猫に食べさせて見なさい、猫が食べて異状がなければ俺等人間にでも食べられる」と云うのだ、つまり猫が試験台になるわけで、こんな風に風にして土地に生育する茸の新種が次々と試験され我々の食卓に上る様になるのかなと思つた。間もなく次の停車場で一行はドヤ／＼と降りてしまひ、車内は再び静かになつたが、僕にはその珍種茸を食べさせられる猫の生死の事がいつまでも頭に残つて居た。

句評偶感

不二田一三夫

ある川柳社の先輩に、雑誌では何故句評をやらぬのかと訊ねたところ、賞める場合は良いが、その逆の場合は句者が気を悪くするからやらぬほうが無難なのだと答えてくれた。しかし批評には悪意がないのだからかまわぬではないかと重ねて言つたが、結社というものはそういう性質のものではないのだと、不可能に近い返事であつた。これは川柳家総意の言葉ではないだろうが、そんなものかなアと思つた事である。

×

後輩が、先輩の句に対して無礼な暴評をしたとかで、他社でゴタ

ゴタがあつたそうである。柳界の志賀直哉事件でもあるまいが、句評とは賞めることである、では困るのではないだろうか。賞め合つてよるこぼせ合つて、それで川柳が伸びるものなら、これに越したことはない。

×

阿倍野支部へ、よく指導に来てくださる清水白柳子氏の句評は、柳界の異色とでも云のだろうか、その野人的口調もよし、その毒舌また快なる哉である。

時には落選句をえぐつてくださるが、正に痛烈、実に小気味よい酷評は、私のような新参者には、又とない勉強になるので有難い。

「文字を十七並べたら川柳やと思つんのんかいナ」

あふれる温情あびせる毒舌。

道田葉平氏が選をされた時はまつたところ手も足も出なかつたが、これは私だけではなかつたようである。白柳子氏が葉平氏の川柳に対して痛烈に批評されたのは今でも忘れられない。

×

戸田古方氏の句評は非常な名調子で、生徒に講義されるように親切そのものである。空前絶後に近い表現を以て激賞されるあたりお人柄であらう。昨年十月、近作柳樽十九頁の上段三行目の

同舟近詠

松山市 前田 伍健

敬老会帰らば元の風当り

儲けたらよい写真屋のほめ言葉

ヒナ段へ侵略に来る男の子

オカッパの歌手へ楽団仰々し

長野県 高峰 柳 児

停年へ娘は結婚適令期

雪はめて重役室の広い視野

大阪市 石田 沐天

投書マダムこれは／＼のスキヤンダル

いまさらに吾が子々と社会面

まだ此処にアバンで御座る髭がいる
鮎をやれば集る鯉が多数決
バスガイド一つ覚えの美辞麗句

今治市 長野 文庫

結局は知らず当座は金が勝ち
大安の日に結ばれた縁なのに
一つ丈役に立つてるカレンダー
人間も容器次第で売れてゆき

大洲市 米沢 曉明

焚火々々背広エプロンチャンチャンコ
御用聞きまでも女中の方を褒め
子供まで居留守を使うおそろしさ
部屋もよし人待ち顔の置炬燵

樺の跡 鮮かに漁夫の腰

(山口県 秋穂)

を句評された時、アップ(大写し)ロング(遠字)等の映画用語まで使われて、文字通り最大限の言葉を以て大激賞された。

この二月には、私の聞き損いだつたかも知れないが、柳聖という表現で、中島生々庵博士の

この無理を聖天さまもめてあまし

を激賞されたが、それにも劣らぬほどのものであつたことを、山口県の田中秋穂氏にお伝えして、よりご精進されんことを祈つてペンを開く。

お酒の前後に

マルチ★B12錠

二日酔・悪酔
肝臓疾患に

20錠 50錠 100錠

武田薬品



川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「蕾」

久しぶりの課題でしたので相当の投句がありました。俳句のような「蕾」という題も柳人は柳らしくこなして居られました。

「蕾」というと自然の植物そのまゝを扱えばよほど俳句らしくなりませんが、こゝに引用しましたのは大なり小なり人生と関係をもっています。自然の植物に縁のうすうなものから順次……

春というに蕾のまんま細う病み 静観堂
声変わり気付けば蕾ふくらみ 真路

「細う病み」に似た句は相当ありましたが、読みかえしているうちに残ったのがこの句。平凡にある非凡、垢抜けした句。春と蕾も重っていることが目障りになりません。

句よりうすいようです。

生けられた蕾は床で咲くときめ 豊年

これが花あれば葉っぱになる蕾 真路

蟻も起きな蝶も起きなと蕾呼び どんたく

どの句も一寸読んだだけでは自然の蕾ズバリとも見えますが、豊年さんの玉の輿に乗ったというか、二号にでもなつて手折られゆく美女を見るようです。真路さんの

のは教壇の上から五十人の生徒をながめている先生の心境に通じます。どんたくさんのが一番自然に近いようですが、それでも先覚者というようなものをほのかに感じさせます。

明日咲くという蕾を大事にす 登

実る気か瓶の梅にもある蕾 柳絮

蕾よし開いてもよし庭の梅 堯二

登さんには一粒種の子をいとしむ両親の慈愛が、柳絮さんには

蟬の斧といった一抹の淋しさをたゞよわせて人の世に通じます。

堯二さんは又ぐっと悟った心境で必ずしも年の老幼には関係なさそうです。

丹精の蕾へ春の陽を選び 牧人

丹精の蕾へ春の陽を選び 牧人

丹精の蕾へ春の陽を選び 牧人

丹精の蕾へ春の陽を選び 牧人



不 朽 洞 会 か

▼路郎先生はこゝ一週間ほど外出をせず、酒を飲まず選句と原稿執筆に専念されている。「一週間も

益を手に入れた」なんて一昨年病臥した時以外にはないことなので、その多忙さに自分でも呆れていら

れる▼中島生々庵医博(大阪市)は長男二男三男の三人が試験で頭

をなやましていたが、早くも三男孝之君が中学入試にパスされた

と喜んでいられた▼野村味平氏(石川県)からの来信では「当地

は三月に入ってから三、四日と二日間だけがからりと晴れ切った空

を見せましたが、あとは冬型の気候で春まだしの冷めたさで居りま

す」と▼武部香林氏は先月来、眼を悪るくされ太田良子女史を煩わ

して治療に専念されている▼酒井ひか平氏(兵庫県)から川雑婦人

友の会の四月吟行、万事O・K。

川雑篠山支部長夫人小西富士子さん始め婦人作家の力の入れ方、六

万石城下の桜、天守台からの眺望正に圧巻と云うもの、デカンショの町で会員の畑宗匠の野だてのお茶の風雅、多数来会を待つとのうれしいより、是非大挙参加されたい▼小西無鬼氏(兵庫県)は、ひか平、喜天、汲流の諸氏と共に三月四日東郷温泉へ会社のレクレーションに参加、望風楼に宿泊、島取に向い河村日満氏其他に逢われ柳談交誼を温められた▼浜田久米雄氏(岡山県)は岡山駅助役として日々多忙に過されているが、

この二、三月調査の用務の為め毎日福山駅通勤殊の外多忙の由▼阪田良坊博士(下関市)は二月二十四日部長以上の九州地方会国鉄ブロッコ会議へ出席、母校大学へも立寄後、湯田の国鉄嘱託医歯科研究會へ出席、長崎の永井隆博士の墓前に供花、「原爆をのり疲れて眠る墓石」と弔句を寄せられた▼尼緑之助氏(出雲市)は中国新聞の島根柳壇の新設と共に選者を担当の外川柳師筆を寄稿、川柳道に益々精進の由。なお、中央病院内「だるま川柳會」にも尽され、竹原雲平氏と共に指導に当たっている。柳壇の為めお呼び申上ぐ▼大西迷窓氏(高知市)からの消息によると支部会員百名獲得を目標に益々精進中とのこと、なお二月十五日二女御出席、母子壮健の由▼弘津柳慶氏(下関市)は二月四、五両日夫人同伴太宰府へ観梅

オフイスの花は蕾のまゝで
枯れ 南天

抜目なく蕾もちゃんと防寒
具 文平

この辺まで来ますと人生の色は
よ程うすれて来ていますが、それ
でも牧人さんの「春の陽」は越境入
学の学校らしくも見えないやあり
ませんか。南天さんはうっかり口
を開けばもろもろのオフイスの娘
さんに叱られそうなので遠慮して
おきましょう。又文平さんは句そ
のものを擬人化していますが、生
れたこの赤ん坊にもある生きるた
めの抵抗力のことにふれているよ
うです。

そういえば

本能が切られ蕾を持った桐

英断

はより生物学的です。

咲くように禁脈をして蕾剪
る 柳 叟

故郷の家にもあった木の蕾
英断

無精者蕾のまゝで枯らせて
る 振氏梵

人間が植物の蕾に向きあいなが
ら、ある時は希望を、ある時は無
慈悲でありました。そうしたさま
ざまのすがたがこれらの句で自然
の蕾を自然のまゝであつかいなが
ら人間性をにじみ出させていると
もいえます。

ふくらんだ蕾へ慌てた子の
春着 文平

この句も蕾と人生なのですが、
今の三句ともちがいが、その前に持
ち出したいろいろの句とも又真路

さんの「声張り」のモンタージュ
ともちがった句境です。この句の
蕾は単純に季感だけをねらったも
ので、外形は川柳らしい字句や川
柳らしい穿ちもあるので立派な川
柳といえましようが、蕾の扱い方
からだけからいえば俳句的なとも
見えます。

俳句といっても俳句らしい従来

からの俳句ですが、自然に真正面
に飛びこんで行こうとしています
。季感一路、「蕾」そのものが

すでに季題となつて、その他のこ
とばは蕾を包む自然の描写のため
にすぎず、いろいろとそれを助け
るような道具立てをこしらえて、
春又は早春の雰囲気を作ろうとひ
たすら努力しているように見かけ
ます。もし人生が入ってくるとし
ても淡い程よく、むしろその淡い

ところに俳句の醍醐味があるとい
われています。「蕾」というのは
俳句的ですが、柳人たちは以上の
ようにかにも人間くさく取あつか
っておられるのです。

最後に字句の添作を一、二、
あの娘はねまだ蕾ですよ
とお上の眼

娘は妓でありたく、お上の上は
女将とした方が句の意図をはっき
りさせます。

着がえしても一度出てゆく
俄か雨

これは雑吟の中の一句ですが、
「も一度出て」行くは字余りにす
る必要はなく「出直してゆく」と
された方がよろしい。

研究題 「胸」

切 四月十五日

発表 六月号予定

授句先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

金泥集

麻生 葭乃 選

約東の日は茶羽織でよい温くさ きさ子
約東の小猫を持って来たに留守 同
深酒をせぬ約東で旅立たせ 阿茶
約東を守らぬ彼に尙惹かれ 白香
終電で来る約東へ炭をつぎ 美舟
金で売る約東女眼を伏せる 千代美
約東の土堤はアベック組が占め 湖月
約東をした日と同じ船が見え 都詩子
指切りヘテニシヤの夢が延び 富士子
約東へ出して留守居の妻淋し 花代子
予約不履行男とわ男とわ 若菜
老らくは約東だけで若がえり 貴洲
約東の時間に来たに御来客 徳子
約東が出来た後からはしがられ 有子

約東の汽車がホームへすり込み 知恵美
指切りを嘲いたくなる年となり 芙蓉
寒がりや今日の約東おけ出し 鈴江
約東へ時計の栓子をたしかめる たつよ
約東の金を屈ける除夜の鐘 満寿子
百姓はせぬ約東で嫁が来る 年子
心もとなないお人約東念をおし 初穂
約東をした人待ってもう三十 梅林
見舞の子指切りげんまして帰り 千永
契約に追われつづけるウターの座 奈良子
給料日はずむ電話をそっとおき 幸子
車まで奮発したのに相手まだ 清子
綴方約東やぶった父を書き 花鶴美
先約をはずしてまでも来た芝居 葭乃

に出向かれたと▼黄瀬美秋氏(滋
賀県)尊父入院加療に依り手術経
過良好の由、一日も早く御快癒を
祈る▼梶尾節子氏(川雑婦人友の
会会員)は三月五日津山市で華燭
の典をあげられ、新婚の旅橋立か
ら「太陽のまぶしき貴方がまだ言
えず」アベックばかり橋立は時
雨する」の句を寄せられた。友の
会から祝電によって多幸を祈った
▼田垣方大氏(倉敷市)の来信に
よると「本日は春には珍らしい雪
となり底冷えのする日で学校での
句会は絶対に火を禁じてあります

新会員紹介

三月

阿部竜太郎(富田林市)正

西田柳安子(大阪市)正

福田 正菱(大阪市)正

以上 白柳子氏推薦

摩天郎氏推薦



一路集

リベート

土井文蝶選

人払いしてリベートの話なり
 リベートへあたれ抱負も崩れかけ
 リベートで赤坂開く夜が過ぎ
 リベートの分け前ボスがゆすり来
 リベートがもう見込んで選挙戦
 リベートを出す云うまでじしとき
 註文はおじさんリベート先払い
 リベートが二号置くと墮落させ
 リベートは大きいから網を脱け
 何喰わぬ顔でリベートの酒を飲み
 重役がリベート臭い家を建て
 リベートが小膏へ続くも知らず
 首はいやリベート丈にある未練
 リベートも見込んで額で落し
 芸者のモモからリベートの額がは
 リベートの話は茶屋の奥の部屋
 リベートを払うも手が板につき
 暗黙の内にリベートはじかれる

三思楼

リベートのからくり二号は知って居り
 リベートがなけりや大物動きかね
 血税がリベートなどに化けていた
 リベートの事から仲間割れ初め
 役得がリベートほしい顔で来る
 リベートの証拠を芸者知っており
 うやむやにリベート何処か行つちまい
 リベートへ次の工事のこともあり
 リベートをもう早耳は知っており
 リベートが欲しい話がうますぎる
 リベートの方をお先に決めて来る
 リベートがありまの言われだけ
 リベートへ下積までがあやしまれ
 リベートもちゃんと見ている見積書
 リベートのスキヤンダルもう忘れられ
 リベートの一線越えて汚職をし
 税務署に内緒リベート別口座
 是よりが冷めてリベート握る腹
 リベートを腹と腹とが探り合い
 リベートを入れる財布は別にあり
 リベートをとれる地位迄たどりつき
 リベートをしる幹事に眼が光る
 リベートの裏に女が糸を引き
 リベートがそれ洗濯機又テレビ
 リベートで生活す名刺を派手に刷り
 (人)リベートは秘書に任してラッ振る
 (地)リベートは他人名儀の家を建て
 (天)リベートは秘書に任してラッ振る
 (軸)リベートの桁が違とうをふかれ
 リベートの取引煙草吸いながら
 応接間リベート渡す手が震え

新刊

長野文庫選

新刊の宣伝程にない中味
 ラブレター挟んで送る新刊書

新刊を待つて自分の名を探し
 面白くない新刊がベストセラー
 無代進呈新刊物もある世なり
 新刊が陽の目も見えずに反古に
 新刊の魅力的なる名に釣られ
 新刊も一寸変わったわけのこと
 新刊が屈く子の趣味親の趣味
 よく目立つとこに新刊並べられ
 定価見て結局新刊諦める
 宣伝の割に新刊売れぬなり
 新刊の広告店を飾り立て
 寒空に見る新刊の様の絵
 新刊書買われた丈で又積まれ
 前祝いした程新刊売れもせず
 流行歌追いつ追われつ新刊書
 ストープの話新刊からの知恵
 家計簿は新刊買った丈赤字
 新刊が母にも届くいゝ子持
 新刊へ手垢がついて戻って来
 新刊の題字に名士筆をとり
 新刊を借る約束の二三日
 新刊へ商魂型を変え型を変え
 新刊の序文で売れたとは知らず
 新刊書評の出で居る欄覗き
 新刊を一渡り見て本屋を出
 新刊を店番台の脇へ立て
 肩のこる新刊だから売れ残り
 修養費月一冊の新刊書
 新刊のこゝが書評にあつたこと
 退屈なベッド新刊の出がおそく
 藤森も小野もまだ新刊書
 新刊に代える古本重たすぎ
 新刊へスター宣伝役にされ
 朝刊へズバリと並ぶ新刊書
 新刊の期待外れた味気なさ
 少々は自慢で見せる新刊書

文平 風柳 夜潮 雄声 三六 祥月 可十 同 展気楼 主水 良坊 高志 むじな ひろし 進之助 正郎 同 三思楼 知恵美 雷山 黄蛾 万古人 不二 微風子 柳叟 代仕男 光郎 幸児 十悟 英断 有子 同 初甫 十悟 同 坊

◆お願い◆

課題吟の投句にも成可く本社の柳筆を御利用願いたい。整理上の煩雑を除けるためにも御協力の上文字も随書で分りよく願いたいとは各選者共通の声である。

毎月二十日のメ切も厳守してほしいものである。雑吟と異り翌月号にまわせたため名句を没にするには忍びないことをつけ加えて置く。

新刊書貸し借りをして仲がよし
 焼き直した新刊を派手に見せ
 出張の靴新刊入れて発ち
 新刊の自序で恩師のことにふれ
 同新刊のまゝ古本として並び
 広告ほど面白くない新刊書
 新刊の全集物で読み直し
 新刊の売り切れ迫る本の山
 (佳)新刊書定価の方が気に入らず
 (佳)新刊をもう破つて子沢山
 (佳)新刊を直送させて土に生き
 (佳)新刊の広告飛びつく様に書き
 (佳)新刊の匂い嬉しい頁繰り
 (佳)新刊書売る気でカバーかけて読み
 (佳)評論家先ず新刊へけちをつけ
 (佳)大事にしてねと新刊貸して呉れ
 (佳)新刊に小さい活字で詰め込まれ
 (佳)新刊の序文読んでる様にほめ
 (人)発行の日附未だ来ぬ新刊書
 (地)新刊の知恵で新型着て歩き
 (天)新刊を買って嬉しい蔵書印
 (軸)新刊に読者の知恵を借るカード

葉光 香林 牧人 同 英断 建朗 静観堂 同 五茶 失名 白猫児 十九平 好日 東岸子 三林坊 ひか平 葉光 英断 豊年 有子 光郎 文庫

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月二〇日▼投稿先
本社宛

本社二月耐寒句會(大阪市)

二月十一日 於 光明寺

名句に接すると、心温まると云う、寒
い二月の耐寒句會は、流石に粉雪ちらつ
く寒さであった。しかし、会場は一杯、
此頃はよく集るなアと歓声が聞える。本
日の戸田古方氏の句評は、生々庵、千
容、春雄、花代子、北海、藤波の各氏の
句に、短評を加え、字句の意義と、人生
を語り、路郎師の柳話は、社会の事象と
川柳について、ユーモラスな話の中に、
川柳を通して、生きる道を考えるべき
である、作句にもそれが表れるように説
かれ、後ち、席、兼題の披露に入り、来
会者の熱心に寒さも吹飛んで、朗かな一
夕であった。因みに日本の不朽洞賞優勝
カップは丸尾潮花氏の頭上に輝いた。時
に午後九時。

(摩)

出席者 路郎・一三夫・須賀太・黄
蛾・水堂・白水・南風郎・古方・玲人・
雅堂・万葉・十悟・春集・いさむ・淡

舟・潮花・喜仙・文秋・一十・六竜
子・秀夫・多久志・太路・愛論・峰春・
黙平・みのる・幸男・堰子・ひろし・省
三・賀峰・昌子・好郎・素男・狂二・凡
九郎・立児・博也・静馬・淀月・与呂
志・博遊・山茶花・水茶・葉乙女・牧
人・尚徳・全信・生々庵・文蝶・進之
助・言也・東洋男・三司・白柳子・利
武・小松園・涼一・摩太郎・没食子・へ
とち・烏莊・霞乃

兼題「甑足」 麻生路郎選

甑足へ若い教師は先にたち 阿茶
甑足のデブにはデブの走りよう 太路
甑足の旅とはまづい帰朝談 三司
級長に嫌な甑足なおつゞき 立児
甑足の横を社長の家乗車 狂二
甑足の写真家内を笑わせる みのる
遅刻だと判つて甑足やめにする 静馬
甑足でツリを忘れた客を追ひ 涼一
甑足の足を阻んだ貨車の列 摩太郎
甑足の目標となる瓦斯タンク 栄
運と言う奴甑足で通り過ぎ 文蝶
甑足で行く老婆の蔭薄し 幸男
甑足で行くと質草背負わされ 堰子
甑足で声かけておる忘れもの へとち
甑足は後鉢巻 続くなり 烏莊
甑足もせず遅れてくる課長 水堂
体操が又甑足になる二月 須賀太
甑足へ女は裾を乱さない 潮花

兼題「温泉」 北川春集選

万病に効く温泉で風邪を引き 雅堂
湯の宿の意外な窓に富士が見え 薫風子
温泉に来て阿呆らしい風邪を引き 生々庵

湯の宿で深雪のようなに採まし 黙平
温泉の情調とやらの俗めいて 凡九郎
古稀祝う母を有馬の湯に連れる 玲人
温泉へつからず飲んで騒いで寝 一十
乗りおくれが時間まちする露天風呂 古方
お連れ様わと湯の宿でことわれ 水茶
一泊の温泉の旅疲れ果て 淡舟
温泉で垢を落して自習する気 博遊
温泉で逢えば儲けて居るらしい 文秋
湯の宿でハッピーエッセイ書き終り 牧人
どつと来た温泉客が湯をこぼし 知恵美
温泉も未だに知らぬ妻のしわ 一乃字
思ひ出の温泉へ来る独りぼち 一十
新聞を寝たまゝ読んで温泉に飽きる 六竜子
麻雀の半端は温泉に又はいり 立児
上野出が温泉町でギター弾く 一三夫
温泉に一夜泊りが弾かすなり 黙平
温泉場労災で来てつまらなし 山茶花
三等で来てても熱海の湯は温し 三司
温泉で温めスキーで又冷やし 阿茶
団体で来れば温泉頼りなし いさむ
温泉が効き過ぎたのか双児です 玲人
本当の湯治は隅の方へ寄り 小松園
なにに効く湯も知らずにホネムン 潮花
トルコ温泉からは真つす帰るなり 春集
銀婚の温の旅血圧気にしつゝ 同

兼題「瓦斯」 丸尾潮花選

瓦斯風呂のメーターこの月ちこあわて 生々庵
瓦斯ひいたのに炭代同じこと 堰子
今年こそ瓦斯を引きたい火をおこし いさむ
水道が埋められ瓦斯が掘りに来る 省三
ガス代が馬鹿にならないこ焼屋 涼一
瓦斯ストーブ遠く離れて庶務の隅 好郎

瓦斯小さく使つて母は世帯馴れ 葉光
瓦斯臭い台所やなと妻の留守 与呂志
瓦斯もない所に住んで大阪市 没食子
メタン瓦斯ないかと穴を覗いてみ 淡舟
瓦斯代のことアバウトめつづけ 小松園
瓦斯つけて妻を寝坊にしたらいい 素男
中毒死させて瓦斯代払わされ ひろし
住込へガスのにはいり寝つかれず 水茶
芯のある御飯を瓦斯のせいにする 文秋
瓦斯風呂を長が湯の客へ念を押す 生々庵
病院の瓦斯台おかゆの跡ばかり 雅堂
瓦斯ストーブもう切られてる 博也
姑は瓦斯の御飯が気に入らず 静馬
閉ぢこめた瓦斯で金魚が浮いてた 知恵美
すき焼の又ゴム管にけつまづき 万葉
飯うます瓦斯を頼んで市場籠 黙平
瓦斯代を半半にする二階借 淀月
瓦斯の栓夫に頼み化粧する 淡舟
瓦斯があるで何とかやつてゐる夫 古方
初産のうれしい不安ガス捨る 牧人
ガス今日は附けつ放しの目出度い日 南風郎
無理心中する気のガスの出だなく 潮花

席題「植木鉢」 金泉万葉選

掌の万年青の鉢で一とくさり 十悟
植木鉢結局妻の用がふえ 博也
ウインドで花が咲いてる植木鉢 文蝶
一と冬を暖爐と過ごす植木鉢 言也
孫の眼に枯木と映る植木鉢 玲人
植木鉢此処は恩給生活者 山茶花
アバウトに住んで苦心の植木鉢 小松園
退院の荷物の隅に植木鉢 涼一
植木鉢何やら赤い芽が見ゆる 一十
引き抜けば鉢の姿の儘の株 太路

植木鉢いじるボーズを子が笑い 狂二
植木鉢天気予報に勞られ 黙平
植木鉢守衛のひまにいたわれ 南風郎
病人の見える所へ梅の鉢 春巢
水だけは欠かさぬ形見の植木鉢 同
植木鉢キヤツチボルの向を替え 堰子
植木鉢替えて貰つて病みつゞけ 省三
閉鎖した社の隅にある植木鉢 静馬
社長出勤植木鉢の向を替え 愛論
先代の苔が絶えない植木鉢 玲人
物干の敷布が触れる植木鉢 文蝶
植木鉢の位置が氣になる猫の恋 文秋
胃潰瘍なおつてからの植木鉢 博也
親ゆすりもてあましてる植木鉢 生々庵
経営者替わると知らぬ植木鉢 水堂
屋上の松竹梅は役がすみ 万楽

席題「腹の虫」 菊沢小松園選

腹の虫押さえて續けて平社員 静馬
腹の虫昔の味だなどと思ふ 春巢
腹の虫押さえる煙草の手がふるい 好郎
打ちこけて聞いてもほしい腹の虫 文蝶
腹の虫お世辞云うてるなと思ふ 春巢
腹の虫案じよう鹹になりにかゝり 博也
腹の虫公判廷で喰いしばり ひろし
サラリが押さえた腹の虫 太路
腹の虫おさえてお流れ受けに行き 春巢
腹の虫押さえて金に妥協する 愛論
腹の虫一寸無理やと思つて居 博也
今に見ろただではおかぬ腹の虫 多志
腹の虫一杯飲ませばつけあがり ひろし
妻の愚痴腹の虫にも云いきかせ 生々庵
腹の虫夜更けの床を起こさせる 言也
腹の虫確と押えて養子なり 太路

腹の虫殺して添わす程に折れ 文蝶
腹の虫おさえて妓撥をもち 潮花
限界が来たとはきつい腹の虫 太路
腹の虫叩きつけた金がない 万楽
腹の虫じつと押える子の寝顔 淡舟
腹の虫まだおさまらぬ靴すべり 万楽
真実を聞いておさまる腹の虫 小松園

席題「ボデビル」 土井文蝶選

ノイローゼ治す積りのボデビル 春巢
ボデビルの脂を待つ力こぶ 万楽
蚊ごんの様な力むボデビル 生々庵
ボデビル年には勝てぬと思ふ 利武
衣食住足りて近頃ボデビル 水堂
親の汗子の汗一家ボデビル 没食子
ボデビル服が合なくなつてくる 博也
ボデビル仲仕やんやんおかしく見 一三夫
ボデビル背だけの方まで延びて欲し 涼一
ボデビルの頭の方はどうする気 古方
あばら骨はつきり見えてボデビル 愛論
ボデビルひさの云う程肥えもせず みのる
軽業に似た事もするボデビル 太路
ボデビルの胸三角に盛り上り 泉水
流行ときいてやる氣のボデビル みる
血管がはみ出しそうボデビル 南風郎
大寒の一と汗かいたボデビル 三司
ボデビル自分の歳を忘れとり 水堂
ボデビルはげた頭へし上げる 全信
配給の量も知らずにボデビル 進之助
ボデビルやつぱり金のいる話 凡九郎
女房が鼻で笑つたボデビル 春巢
井を三杯食つたボデビル 山茶花
パーベルをうがしてある事務の隅 みのる
ボデビルはよくくく止めまつさ 万楽

椅子二脚宿直室のボデビル 黙平
ボデビル妻がひとりて氣なつかい 博也
ボデビル赤い尿した日もありき 太路
見て呉れる彼女はいしボデビル 文蝶

淀川支部句会(大阪市)

寝床から冬の鼠を叱りつけ 花村
悪友に証明させる恐妻家 若菜
動いてるようには見えぬ沖の舟 多志
動かない地位で停年来て仕舞い 水堂
動き出すデモヘ刑事の眼が光り 曲蝶
政界の動きへ民の無関心 礼司
孫出来て嫁に會計奪われる 野甫
封建ねと子の嫁はつきり物を云い 三十郎

堺支部句会(堺市)

首相談又もつれてる朝刊紙 雄声
アリバイを明かしてくれた日記帳 玲人
憶れの都会冷たいガード下 狂二
誘惑へ子供顔が浮んで来 圭水
寒稽古あとの一杯それもよし 南宗
道場の足が冷めたい寒稽古 摩天郎

鳥取支部句会(鳥取市)

落第が出世頭のクラス会 幸
飲み過ぎを脅かす医者は妻の知恵 多可志
かじかんた手ヘストロゾの燃えつかず 天保銭
ビールなら頂きますと妻も飲み 無川
真似さえも出来ぬおれが知れ 昭夫
酒飲みの父に似るなと妻祈り

オーバーに燃えつく迄も火にあたり 月光
知らぬ顔同じ会社のバツチ付け 淑恵
枝ぶりを先生ほどにまげられず 粗粒
山燃が七堂伽藍浮き出させ 三歩
公職のバツチが木戸をすうさぬ 遊星
就職難燃える希望を打ちひしぎ 耕民
七光り落第しても職は待ち 湖山
罰盃の酒グツと飲みグツと飲み 日満
金バツチつけて疎遠の友となり 八歩

備前支部句会(岡山県)

間の抜けた返事もしてる共白髪 東岸子
長生きの系図田が増え家が立ち 正州
長生きが四つの島を狭くする 白季
果報者から信心すゝめられ 秋月
長生は恨まれますと死にもせず 三晃
出来心ふと店員の眼と出合い 操
出来心夫にすまぬことと思ふ 綾女
酔いさめがまだうたつてる祝い酒 柳風子
長生きの眉がだんだん長くなり 三六
出来心とは今更いえぬ仲となり 俊恵
出来心悟す涙があつたりなり 幸仙
出来心かと思われぬちよこをくれ 伊久野
寝てまでと遂に果報はやつて来ず 清風
果報者寝ていて待った歌でなし 東岸子
果報者親の光がまだひかり 浄美
生き道に夫にすまぬ床をしき 圭女

出雲支部句会(出雲市)

シロツブも小児科らしく効いてる 白菊
よいどれをはるかに避けた薬瓶 雲平
尼緑之助報

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

二月十二日 水島慈愛幼稚園 田垣方大報

先ず富山これから医者を呼び出る 木ん馬
力道山薬を呑んでいる写真 白鷗
皿散呑み続け小鳥を飼っている 朱扇
消毒薬のおいで今日もすれちがい みゆき
産れては困る女房の稼ぎ高 出雲
アルサロに出るを悔ゆる夜が続き 万古人
世に生きる夫婦をとりに来る 独仙
鍵かけて居留守を使う日曜日 南香
合鍵を持って世間を捨てゝいる つとむ
無難作に鍵を渡して非番立ち 代仕男
鶯の啼いてる窓に呼び出され 披青
ひび薬手に妻として今日も暮れ 南風
鍵のこと火のこと母の行き届き 岬月
ベルが鳴る会いたくはない空模様 緑之助

起重機の壮観港の格を上げ 千容
赤切符今日は私の旅をする 方大
遮断機のとこで見送りすこしへり 谷水
手不足と言うてお酌して呉れず 万古
遮断機が欲しいと思ふ親心 春日
大望を持って港にささやかれ 五茶
誘惑に負けた我が子をまだ信じ 卯月
遮断機を下ろし秋刀魚を裏がえし 一念
聞き合せ隣近所え先手打ち 越鳥
遮断機が出来て死場所替えてゆき 十九一
慾目かな俺には一寸過ぎた妻 不二郎
相談に発言権のない養子 千代春
猫の手も借りた時に又生れ 亀庵
観送の手前もあつて青切符 麗水
港までわざ／＼汽車で死に來た 風の子

川 弓削支部句会 (岡山県)

二月十二日 於 直原七面山居 直原七面山報

愛情のテープ港の手にのこり 清子
遮断機へ中途半端な立話 まり子
借金で買った切符が無駄になり 明心
遮断機がおりてしまった二人連れ 銀子
家柄が鼻に付いてる聞合せ 承平
相談がすんで妓迎えられ 素天
相談が本筋え来て煙草吸い 尖雷
赤切符出張旅費は二等なり 流風
遮断機へ足踏みをして待つ寒さ 鯉風
先代の罪が尾を引く聞き合せ 桂月
手不足なのに兄貴まだおきず 達也
ゴールイン重ねて切らす青切符 天風
相談へ妻が背後で靴をとり 水番
聞き合せ塀の高さも見て帰り 同笑
聞き合せさつきと違う事を聞き 可坊
聞き合せ先祖の墓も見て戻り 万坊
マドロスが港々に恋を捨て 平風
誘惑に勝ったが心淋しい日 狂風
相談を持ちかけられる地位になり 飴ン坊
相談をしてはしかなかった家出の娘 晴生
港町外貨をかせぐ赤い爪 隆文
遮断機が花嫁しみる／＼見せて呉れ 勝通
仕事量言わず上役こき使い 峰豊
嵐の目と夜の目と違う港町 風一路

忍び泣きした日の日記字がうるゐ 奇童
摘み草の子を追ひ立てている入陽 千斗
石地蔵入陽の影が道をきり 双石
入陽フト旅の心に引懸り 七面山
波の音ももうきゝあいた旅の宿 百郎

川 篠山支部句会 (兵庫県)

二月 小西無鬼報

波の音の擬音に舞台裏忙し 湖月
荒波を乗切る覚悟の綱を解き 喜楽
波の音に金色夜叉の幕があき 陽子
もう一つ峠を越せば妻の里 東岸子
くたびれた品も売ってた峠茶屋 秋月
峠茶屋町の映画のピラが揺れ 葵邱
井戸だけは他所様にある峠茶屋 不老
ロマンスカーの花の峠をゆれて越し 千年
一列で峠を越えた旅役者 七面山
さよならの声がかすんだ峠道 賤女

まゝごとのお銭になつてゐる小石 登月
貝よりも小石重たい潮干狩 眺城
子の喧嘩身近な武器になる小石 一平
十代の喜び小石を川へ投げ 越山
埋もれた小石へ学者の凱歌あげ 初穂
砂利道を自転車千鳥足でゆき 柳常
集まれば小石も線路支えてる 文平
南方の小石の遺骨へ涙ぐみ 実世
小石につまずく試歩を支えられ 一風
金策も出来ず小石にけつまずき 英断
事務疲れウツカリインクが袖につき たけし
インクでも墨でも良いと高利貸し 偷多可
思い出の手紙インクの色もあせ 文子
青春へインクの文字も鮮やかに 秀静
借りられた万年筆にインクなし 越山
青インクみだれて今日の走り書き 小菊
インクだけ出して始業へ喫いつける 一雨
アルパムのインクも一緒に上げて来た 秀静
号外のインク湿ったまゝ撒かれ 英断
重役の八時出勤インクだけ 偶借

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社



タチカワペン
タチカワペン
タチカワペン

保険屋のインクすら／＼書けるなり 喜天
酒好きと云う丈で縁談亦こじれ だし
好きな娘の眼を意識して壇を下り 比斗良
バ、好きと云われて見た土産提げ 無聖
イヤリングパスの視線を皆集め 文平
恋敵ウインクしたを見逃さず 英断
綿帽子チラと視線を向けただけ 枝葉
逢つて来て母の視線を避けて寝る 無聖
横向いた視線へ返事たしかめる ひか平
ブレイクのかゝつた視線が酔わさぬ 左文字
手品師は視線を集めごまかせ 初穂
横顔に視線感じてから黙り 無鬼
川 篠山支部電々グループ (兵庫県)

前川左文字報

職員はサービス攻めの重荷負い 柳常
サービスの宣伝程にない旅館 千枝子
サービス代は取らなさんほうすこれ 念坊
真様のサービス堅くなるばかり 左文字

減税はどの政党も公約し 慶次郎
税金を引かれて妻がほしくなり としお
月給とり税金もくなく引かれ 柳常
税金の督促状に酔も覚め 鈴江
滞納の議員大きな口を開き 迷人
税務吏がニヤツとして見た洗濯機 けん坊

雑川 ハワイ支部句会 (ハワイ)

一月三十日 於 マキ、荘にて
築山快夢起報

幸運が隣まで来て廻れ右 泉水
幸運は思はぬ者に転げ込み 木公
停年になつて幸運あきらめる 柳葉
幸運はいつも我が家を素通りし 細民
幸運の裏道を行く失業者 伯楽
幸運の夢からさめた四畳半 快夢起
聴いてゐる無理幸運が待つて居る 呉有
幸運を掴むに妻の知恵も借り 魔花麗
幸運は已に足りて子沢山 拜山
幸運にされて淋しい玉の興 草一郎

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

二月十九日 於 光郎居
野村味平報

独り者指先の出た足袋をはき 明石
足袋一ツ縫げぬ癖してイヤリング 昌男
春夏秋冬西郷どんも単衣物 桃園
イヤリングうち娘姑娘らしく見せ 味平
奥様の出好き主人は子と遊び 恒雄
正直に言うた意見が痛に触れ 同
卒業のもうイヤリングして写し 光郎
雨の日の置屋火鉢で足袋を干し 久雄

雑川 木次支部句会 (島根県)

二月十日 於 城角居
藤井明朗報

ひざ枕しても株値開いている 明朗
ひざ枕明日荒波日本海 蜂人
仲直りさめぬ盃にがく受け 緋文字
借金をすませた後で仲直り 明暗
申告が迫り帳簿の締めくくり 鶏声
七十が迫り浮気も終止符か 詩朗

雑川 米子支部句会 (米子市)

二月十九日 於 節枝居
三鴨美笑報

訪問の客にあわてた洗髪 明芳
訪問の新婦の方がちと年増 新雪
独り言聞いてしまった招き猫 久城
順番に母が氣をむす試験場 美笑
心中を救い連署で来る礼状 紅帆
通信簿順番ばかり母は言う 澄子
訪問着どうのころのと妻の見栄 吾柳
流行の衣裳見つめて独り言 信坊
二号宅だから訪問ちとあわて 詩郎
礼状に趣味の一句も添えておき 君枝
失恋が月へ恨みの独り言 愚球
面接の順番待つ間の薄化粧 飄太
礼状にあふれ出ている人のよき 素生
訪問に足のしびれがやり切れず 蒼一
礼状の二仲に金また貸してくれ 普泉
訪問に横から妻の社交ぶり 一机
信じつゝ思案が漏らす独り言 定男
順番のビリが課長に先になり 庄太
待てど来ぬバスへ詮ない独り言 無閑堂

雑川 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

感情の教師のムチが批判され 峰松
懇々とさとして検事の親心 呆鴨
腕白の罰はお八ツの量が減り 泊川
満二十才父に遠慮のない煙草 夷男
正直に言つて罰金安くすみ 天作
鼓動だけ嘘でなかった夢が覚め 青水
家も田も屋敷も売った夢となり 伍郎
駅長の気転やつと気車に乗れ 代四榮
あゝ夢でよかった胸の汗をふき 雪峰
臨終の母に会えたる顔の汗 仙柳堂
抱き寄せた影引離す下駄の音 哲二
留置場の一夜母の夢で明け 愛子
かゝり子の寝顔に遠い夢をのせ 六花
うたゝ寝のもう天下を取った夢 六花

雑川 松江支部句会 (松江市)

二月十五日 於 山川児居

迷い子と婦警残して灯がとまり 与根一
日本間へ外人らしい座り様 乱雪
日本間の暮しヘルンの気がたじふ ふる児

大阪通信病院句会

一月例会 森下愛論報

女房が若く欠席ひやかされ 冬生
欠席の裏をさぐればランデブー 祥月
欠席の議員故郷で策をねり 喜久子
ほんとうは会費が高く欠席し 巷雨
三月の表情履歴書の溜息だ 山川児
変な課長机のごみを吹く 快哉
日本を基地のモデルにしてしま 孤呂二
モデルもう何処見られても自信あり 可明
モデル農村貧農は居ないことする 天痴人
穀をぬぐ如くにモデル脱ぎすてる 一兆
専太郎えがくモデルのいゝ素足 稔

333 川柳会 (堺市)

十一月六日 於 島野工業K・K
川村好郎報

出帆のドラややくその様に鳴り 史葉
ややくそになれない年をさびしがり 草右
ややくそになつて仕事の鬼となり 方正
ややくそにストリッパ胸を病み ハナ子
ややくそで呑んで病氣のもとなり 喜男
ややくそで呑んだお酒がよくたり 春男
ややくそにもなるろ脛かじりが五人 春男
鼻声にまたかと旦那とりあわず 竹荘
鼻声についさせられた廻り路 春雄
鼻声の威力を子供ももうおぼえ みのる
鼻声にウンと云えない左前 夏生
鼻声に旦那とうゝ丸められ 愛論
鼻声で声帯模写が鐘三つ 幸男
鼻声の受話器へお風邪かと聞かれ 没食子

バラッもアクセサリーという若さ 晴美

フアッショシヨウ次もバラソル差して出る 狂二
 バラソルがバツタスタイルシヤンに見せ 夕霧
 バラソルを渡しオールを握つてみ 元歩
 バラソルの色へも三十かくす気が 好郎
 バラソルもおんなじ柄で腹違い 梨郎
 謎かけた本心なのと念押され 一葉
 遮断機が降りて本心また変り 貴山
 商魂へ派出な封筒色刷し 素男
 グラビヤで二度目の妻が語れる アート
 印刷の札状忘れた頃に 梨里
 印刷が間違つてるとねぎらわれ 紋平
 PTA寄附は生徒に刷らせる気 松夢
 喫茶店テレビ外からチラ見せ 好郎
 雲ゆきを見て発言とりやめる 高志
 子供も親の雲ゆきみてねだり 元歩
 雲ゆきを見て行商は荷をまとめ 雄声
 雲ゆきへやつぱり巻かれることに 梨里

帝化川柳会 (大阪市)

宿題の夜長電話で唄つてい 好祐
 交換手恋の秘密も聞かされて 甲子朗
 混線の電話気短か腹を立て 利武
 母からの電話へ新妻代つて出 一の字
 意地悪が一人長屋の空気変え 一平
 新婚の電話へ社内の耳が寄り 白水
 意地のない亭主について裏長屋 与呂志
 嫁ぐ日待つ色鮮かな鏡掛 葉乙女
 生欠伸して不景気な話聞き 雅堂
 女房の意地は狸寝さめこむ気 京一樓

みつくし川柳会 (大阪市)

栄光に笑つて語る苦が多く 夢人
 五十まで遊びつゞけて中風病む 清恵

二月十日 於 よろづ相談所病院 菱田満秋報

団体のお国訛りが耳につき 糸潮
 いも虫のように団体バス走る 凡平
 団体の旅行色気もなにもなく 梅林
 団体を指でうごかすバスガイド 蛾燈
 団体の旅ただ飲んでさわぐだけ 準平
 お遍路の団体春をつれて来る 季生
 教養も趣味も身につくころに嫁き 福陸寿
 趣味ひろくあれもこれもと囃つて見 白蓮
 漫画読むだけの読書を趣味と書く 満秋
 故き人と趣味が同じで賞めらる 花鶴美
 趣味の域出てる社長の筆の牙え 奈良子

板東ベルト川柳会 (神戸市)

想い出はツバメまたくる軒の下 松風
 落書きに想い出がある仁王門 三平
 想い出の顔とこの顔ちとちがい いなか
 アルバムに想い出を秘の嫁さくね 寄与史

富柳会 (富田林市) 阿部竜太郎報

ネオン灯質はここえと呼んでいる 周一
 キヤバレーが火元でネオンだけ残り 水唱
 ネットタイを妻のいいでやつと買い 利水
 見合してネットタイのみが目に残り 美水
 人並にネットタイ結ぶ新社員 友子
 かじかんだ手先がのびるコップ酒 克忠
 底冷えへ順を待つてるもら風呂 三次
 又一ぱい喰わされたかと有権者 増治郎
 賛成というだけ知つて議議員 梅笑
 反対党も追悼の辞だけはくさされず 克忠
 煙草屋の三軒先と教えられ 摩天郎
 もうやめる筈の煙草が又あたり 水唱
 借金に行つてたばこが空になり 増治郎
 此れでもう廃めと煙草に火をつける 独太

鳥取市復興記念

山陰川柳大会

▼日時 五月十四日(日)午前十時よ
 ▼会場 鳥取市東町 児童会館▼主
 催 川柳雑誌社鳥取支部鳥取川柳会
 ▼後援 鳥取県、鳥取市、各教育委員
 会、鳥取商工会議所、鳥取県観光連盟
 鳥取市観光協会、日本海新聞、鳥取放

送局、ラジオ山陰鳥取支社、日の丸自
 動車株式会社

兼題 (各種三句吐)

▼兼題 「ホテル」麻生路郎先生 「鯛」麻生
 霞乃先生 「本望」三嶋美笑氏 「反
 省」浜田久米雄氏 「若葉」尼縁之助
 氏 「裏」小西無鬼氏 「年頃」福島
 鉄児氏 「百姓」広江天痴人氏 「借
 金」大西八歩氏 「正直」河村日満氏
 ▼投句締切四月三十日厳守(出席者

共)投句料三十円(八円切手)四枚可
 ▼投句先 鳥取市叶三八一河村日満宛
 各題一句毎タテ六寸ヨコ一寸の白句箋
 裏に住所姓雅号フリガナ付明記する事
 ▼席題 当日出題
 ▼柳話 麻生路郎先生
 ▼呈賞 各題三光五客(出席優先)
 ▼会費 五十円、懇親会費 三百円
 ▼鳥取砂丘見物、傘おどりの余興あり

季節一品料理

江戸前にぎりずし

アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第六十二回)を募る
 兼題「手」路郎先生選
 締切・四月十五日(句数五句以内)
 発表・四月二十一日(店内掲示)
 投句は 阿倍野区松崎町三丁目
 一〇 大万川柳会宛

柳界展望



▼本社四月旬会は七日(土)午後六時から下寺町市バス停前の光明寺で開催される奮って集会された。
▼南区医師会杏林川柳会(大阪市)は三月二十日午後七時半から阿茶居で開催▲大万川柳五周年記念川柳大会は三月十八日午後一時から大阪市阿倍野区松崎町の大方で開催▼大阪通信病院川柳会は三月十七日午後二時から五階講堂で開催▼川維玉造支部(大阪市)二周年記念川柳会が三月廿三日午後六時から大阪信用金庫玉造支店楼上で開催された▼既報の「税のしるべ」主催毎日新聞社後援の税のしるべ七周年記念京阪神川柳大会は三月廿一日毎日新聞社三階の講堂で開催▼南海電鉄川柳会(大阪市)は三月廿六日午後六時粉浜親和寮で例会を開催以上何れも路郎主幹出席▼川維淀川支部旬会(大阪市)は四月三日午後六時から武部香林居で開催兼題「入学」「横丁」「見栄」の三題▼大阪市交通局川柳会は四月十八日(水)午後五時から扇町の交通局病院サ

ンルームで開催。兼題「帰郷」「夜霧」「人形」の三題▼川維婦人友の会は四月八日(日曜)篠山方面在住の川維婦人友の会員に合同観桜句会を篠山城で開催。当日の兼題、席題選者は路郎先生の外は全部女流作家が担当、男性はゲスト或は附添という形で頗る異色ある句会で開催される。▼川維玉造支部(大阪市)旬会は三月二十三日午後六時白柳子居で開催▼川維堺支部旬会は三月十二日午後六時から摩太郎居で開催▼川維弓削支部旬会(岡山県)は三月廿四日七面山居で開催▼3・3・3川柳会(堺市)は四月九日午後五時半島野工業株式会社会議室で開催兼題「庭」「真面目」「若手」しなの川柳社(松本市)四月例会は廿一日新伊勢町三枝薬店楼上で開催される▼富柳会旬会(富田林市)は三月三日午後一時から富田林市役所日本間で開催本社より好郎、梅里、貴山の三氏出席。▼岸和田川柳会(岸和田市)は三月二十五日午前八時岸

和田駅集合、和歌浦へ吟行句会開催▼川維篠山支部(兵庫県)は二月十二日午後六時から無鬼居で開催▼川維松江支部(松江市)は二月十五日午後六時山川児居で開催▼川柳研究社(東京都)三月旬会は十八日午後五時半から日比谷神社社務所で開催▼川維大原支部(岡山県)は二月十二日午後六時から十坊居で開催▼函館川柳社三月例会は十八日午後五時半から鶴友会館楼上で開催▼川維倉敷支部旬会(倉敷市)は藤井五茶氏山陽川柳一席入選祝賀句会を兼ね、二月十二日午後一時から水島慈愛幼稚園で開催三月例会は十一日に倉敷市南中学校で開催▼川維備前支部旬会(岡山県)は二月十一日午後六時から娘句案居で開催▼おかざき川柳旬会(岡崎市)は二月八日佳晶居で開催▼川維米子支部旬会(米子市)は二月十九日午後六時から美笑居で開催▼川維岡山支部旬会は二月二十日午後六時から日赤支部で開催▼金沢番傘川柳会四月例会は十五日に本多町婦人会館で開催▼三井造船春季川柳大会は二月十二日午後六時から三井造船三友クラブで開催▼岡山電報局二月川柳旬会は二月十六日夜同局で開催▼川柳きやり吟社(東京都)は四月一日午後五時半から千代田区神田の豪徳寺東京別院で開催▼川維下関支部旬会は三月十一日に下関駅会館で開催された▼観光川柳研究会(東京都)は三

月十一日午後五時半から瑤天居で開催▼中松垣雄氏(石川県)は三月四日日本社来訪、路郎師、霞乃女史と歓談された▼木山遠二氏(笠岡市)からの消息によると同地並木川柳会は二月六日午後七時開会七日午前二時あわてゝ散会された熱心振、一同のハッキリ方が思われる。▼税のしるべ総局主催「税のしるべ」七周年記念川柳大会は二月十九日正午から博多櫛田神社内櫛田会館で開催前田雀郎氏の「新しい川柳」の講演あり盛会だった由。▼前田健氏著「たぬき日記」が松山市松前町五の愛媛タイムス社から出版された。定価二百円▼久保和友氏(滋賀県)は三月上旬、句集「車窓のうた」を刊行された。序文楊元紋太氏、頒価五十円、滋賀県草津市渡川久保和友旬集刊行会発行。

(摩)

BK聴取者文芸「趣味のしおり」の放送休止

た放送者並びに授句者は一抹の淋しさを感じないではいられないであらう。
三月八日附の稲葉大阪中央放送局長の信書では単に「四月からの番組改正に伴い、三月末をもって一時休ませて頂くことになりました」とあるのみで、長い歴史を打ち切るにはあまりに簡単であることを甚だ遺憾に思った。放送番組の改正は放送局の自由ではあるが、聴取者文芸が単に思いつき番組でなく、多年継承されて来た番組であるだけに、これが休止、廃止については今少しく慎重に事を運んで欲しかった。
私たちも、この番組の演出が、マンネリズムに陥入って興味を殺ぐことが少なくないことを度々係員に進言したのであるが、新年度に於て放送者数の増減程度に限られ、演出方法に至っては少しも改められず、放送時間にしても、適正を欠いていたが、これも改められるに至らなかった。演出の方法をそれ／＼の放送者によって考案せしめることと放送時間を適正にしたならば聴取者文芸「趣味のしおり」は決して番組改正によって休止せなければならぬ様な悪番組ではなからうと思う。地方文化のために、BK当局の一考を煩わしたい。

(路)



公・私・雑・記

★四月三日が柳壇の先覚、故坂井久良俊の命日に相当するので旧門下前田俊郎氏から「久良俊先生伝補遺」を寄せられた。御愛読を願いたい★前田 伍健氏も「俳縁柳縁」で久良俊翁に一寸触れていられるのも柳縁であらう★久良俊翁はその昔柳誌も出されたが経営はうまくいかなかった方で永続しなかった。それで柳誌の代りにハガキを盛んに、あちこちへ飛ばして意見を発表されていた。久良俊翁のハガキと云えば一度に十枚ぐらい来た。久良俊翁は終始一貫江戸趣味の人であつたから、川柳の革新を志した私たちに用捨なく痛罵した書信を寄せられた。随分長い手紙も度々来た。その一通を私に頼んで壁間に掲げた。革新も行き過ぎてはいけなと思つて反省の資としたのである。今も私の二階の編輯室の壁間に掲げ故人を偲ぶよすがにしている。これは大正三、四年頃のものであるからもう四十余年の昔になる★北川春渠氏が久しぶりに「患者」を執筆した。氏は医博であり、大阪市交通

局病院の内科医長であるから川柳から見た患者を書くには最適の立場にある訳である★東野大八氏の「人間横町」は健筆がますます「牙えて読者を魅了している★丸尾潮花氏の「女流作家訪問記」はなかなかうけがいい。氏の足による努力が買われている訳である★本号は原稿が輻輳したので拙稿「新川柳鑑賞」は一回休載することにした★本誌は川柳を社会に普及させるために刊行しているのであるから、いい原稿を蒐めることに常に腐心している。いい句やいい原稿があつまればそれだけ社会から川柳が認められる訳であるから、川柳の向上発展に協力する意味で、いい句やいい原稿を寄稿されたいものである。その意味から本誌は党派的な差別はしない。「川柳雑誌」を一つの派と考えている人があつたら、それはその人の認識不足である。常に門戸を開いて旧人新人を迎えるのに吝かさでないことを知ってドシ／＼応募されたい。単に投句、投稿だけでなく、

く、いろいろな企画の献策をも歓迎する★私一家が三重県に疎開していたころ私は朝起きると家のそばの藪から箭を掘り出して来た。子どもたちが「お父さん、おなかから竹が生えて来そうや」と云うたほど箭を喰べたものである。春が来ると、今でも箭のことを思い出すのはそれがためである。米の僅かな配給ではどうすることも出来ないでジャガイモを主食代りに

なくなくなったし、井鉢の盛切り飯も喰べずに済むようになったが、アタマの方は容易に元へ戻らないようである。あれほど喰べるものに困つても川柳を見失わずに、今日に及んだ私たちであるとしたら、もつ／＼川柳をよくするために苦しまねばウツだと思ふ。近ごろ、どの柳誌を見ても、少しずつよくなつてはいるが質的にはまだ戦前には及ばない。お互に協力して思案力を深めて行きたいものである。(路)

社の黒板

▼不二田一三夫氏(不朽洞会員)を三月から編輯局に迎えることになった。雑誌編輯に経験があるのので氏の今後の活躍を期待されたい▼市場没食子氏(不朽洞会常任理事)は常任理事と編輯員とを兼ねていられたが今回多忙の故をもつて編輯員を辞任された▼曾て本誌で好評を博していた「川雉案内」欄を次号から復活させることにしたのでせいか／＼利用されたい。この欄では改号、移転、柳誌、柳書の譲り受け譲り渡し其他を取扱うことにする。



小児科 平尾 醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

Printed in Japan

募集

課題吟募集

麦酒 (井句以內) 宮田 不二選
途中下車 (井句以內) 国弘 半休選
青空 (井句以內) 麻生 梨里選
カメラ (井句以內) 新川 博也選
(四月二十日締切)
(五月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雜誌廿句以內) 麻生路郎選
川柳塔(雜) 詠 北川春渠選
文章(評論・研究・感想其他) 柳生路郎選
(毎月二十日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▲「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第十一号

(戦時禁)

B列5号 毎月一回一日発行
半ヶ年 三二四円
一ヶ年 六〇〇円
(送料四円)

昭和三十一年三月廿五日印刷
昭和三十一年四月一日発行

★大阪市住吉区城內市代西五丁目二五番地
行所 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 347

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧
忘れよう！
サーピナ錠



1日1〜2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠！成分含量も多くてお得です

山之内

眼のないはなし



パパもママも ホーライ党
応 南 料 理
蓬菜
大阪 なんば

楽しい生活と住宅博覧会



主催 朝日新聞社 3月20日→5月27日
入場料 130円 小人 65円
近鉄あやめ池遊園地